

令和3年度 教育事業報告書



独立行政法人 国立青少年教育振興機構

National Aso Youth Friendship Center

国立阿蘇青少年交流の家

はじめに

(独) 国立青少年教育振興機構
国立阿蘇青少年交流の家
所 長 川 並 満 徳



当施設は、世界に誇るカルデラ内の「阿蘇五岳」を望む恵まれた自然環境の中に位置しています。その歴史は古く、昭和 39 年、国立中央青年の家に次ぐ我が国第 2 番目の国立青年の家として開所しました。その後、平成 18 年 4 月からは、国立青年の家、国立少年自然の家及び国立オリンピック記念青少年総合センターの 3 法人の統合により、「独立行政法人国立青少年教育振興機構」が設立されたことに伴い、「国立阿蘇青少年交流の家」として新たなスタートをきりました。

さて、我が国においては、少子高齢化、情報化、グローバル化が進展し、また地域社会においても、一人親家族の増、格差・貧困、人と人とのつながりの希薄化による孤立等大きな社会的変革が進む中で、これからの青少年が、これらの変化を乗り越え、新しい価値を創造する立場となるには、自ら考えて、他者と対話・協働し続ける資質・能力を備えていく必要があります、そのためには学校教育だけでなく、学校外での教育や体験を通じた教育が求められています。

当施設では、この阿蘇の立地条件を生かした特色のある活動を展開し、生きる力の育成に必要な自然体験活動、集団宿泊活動をはじめ、多様な体験活動の機会の提供に努めてまいりました。

令和 3 年度は、あらためて言うまでもありませんが、全世界的に新型コロナウイルスが猛威を振るい、人々の日常生活に多大の影響を与えました。当施設におきましても、利用団体様のご意向により、予約のキャンセルが相次ぎ、所内が閑散とする状況が続きました。

そういう状況の中、教育事業については、一部中止となった事業はありましたが、実施時期を変更するなどして、新型コロナウイルス感染症対策をとりながら、社会の要請に応える体験活動事業、モデル的事業、課題を抱える青少年の支援事業、青少年教育指導者等の養成事業及び地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業、青少年の国際交流の推進等、様々な事業を実施しました。ステイホームで外出を制限された青少年に、体験活動の機会を提供することができたと考えています。ここに、その報告書を取りまとめることができました。

令和 3 年度の事業報告書の特集では、モデル的事業の実践研究事業として実施した「阿蘇一周 100km チャレンジキャンプ」について、重点的にそのねらいや意義、成果等を紹介させていただいております。是非ご覧いただければと思います。

また、昨年度、先行実施、本年度から本格実施した事業が、当機構全体で取り組む全国高校生体験活動顕彰制度の「地域探究プログラム」です。この事業は、学習指導要領に定められた「総合的な探究の時間」における「探究」の手法を取り入れ、ものごとを探究する姿勢、主体的に取り組む態度、課題に向き合う力などを身に付けるとともに、地域での実践活動において多様な人々と協働しながら地域・社会課題の解決に向けた取組を行うことで、郷土や自然に愛着を持ち、新たな価値を創造する高校生の育成を目的としています。参加してくれた高校生はコロナ禍で十分な活動時間が確保できない中でしたが、それぞれ報告書を取りまとめ、審査（地方ステージ・全国ステージ）を受けるなど積極的に取り組んでくれました。

また、モデル的事業の特色あるプログラム事業として実施した「ジュニアジオガイド講座」においては、昨年度開発した「水基編」「仙酔峡編」に加え「中岳編」「国造神社・阿蘇神社編」「杵島岳編」「檜尾岳編」の 4 つのプログラムを新規開発しました。これは、地域ニーズである「阿蘇学」及び「ジオパーク学習」の普及のため、当施設が阿蘇ジオパークに「触れる」「感じる」「学ぶ」拠点となることを目指しています。

未だ新型コロナウイルス感染症の収束は見えませんが、今後ワクチンの接種等が進み、日常の生活が戻ることを祈念したいと思います。

職員一同、感染対策に万全を期しながら、今後も積極的に事業を進めていく所存です。ご支援・ご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、令和 3 年度の教育事業報告書を御高覧いただき、忌憚のないご意見・ご指導をいただければ幸いです。

目次

はじめに	P 1
目次	P 2

第 1 章 令和 3 年度の教育事業について	P 3
第 2 章 教育事業の実際	P 7

青少年教育に関するモデル的事業

阿蘇一周 100km チャレンジキャンプの 3 年間の実践	P 8
ジュニアジオガイド講座（全 4 回）	P 1 8
全国高校生体験活動顕彰制度 地域探究プログラム	
オリエンテーション合宿 1 年生	P 2 0
オリエンテーション合宿 2 年生	P 2 1
九州沖縄ブロック 地方ステージ	P 2 2

社会の要請等に応える体験活動等事業

阿蘇の草原キッズになろう！	
①秋編	P 2 4
阿蘇っ子わくわくグローバルキャンプ	P 2 6

課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

新しい自分を見つけよう！きらりキャンプ in 阿蘇	P 2 8
---------------------------	-------

青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

教員免許状更新講習	P 3 0
阿蘇ボランティア入門①②	P 3 2
登竜門へ踏み出そう ～つくりあげよう、私たちのボランティア～	P 3 4

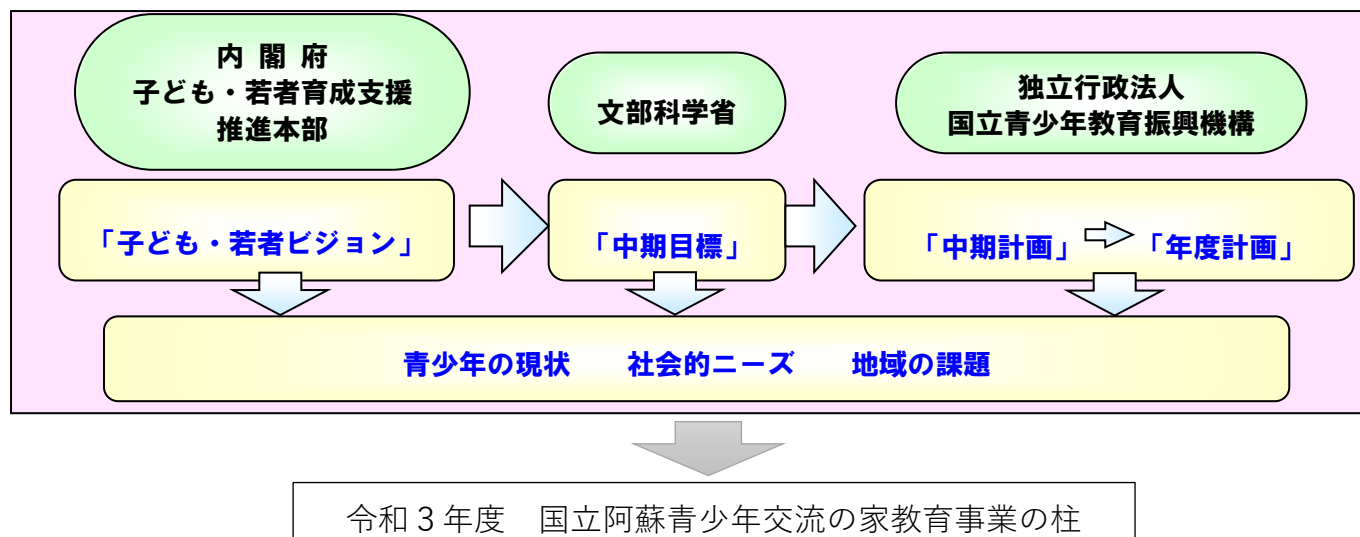
地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

星空観察会～天の川編～	P 3 6
親子で仲良く！アドベンチャーキッズ	P 3 8
親子の交流広場	P 4 0
阿蘇ふるさとづくり未来塾	P 4 2
子どもゆめ基金助成金募集説明会	P 4 4
早寝早起き朝ごはんキャラバンウィーク	P 4 6
Sea サマーキャンプ in 芦北	P 4 8
おわりに	P 5 0

令和 3 年度教育事業について

第1章 令和3年度の教育事業について

令和3年度の教育事業においては、国の青少年教育行政の基本方針及び第4期中期目標・中期計画、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、更に学校や地域との連携を進める中で、「体験の風をおこそう」運動をより一層推進するとともに、事業の重点化と普及を図ってきました。また、「阿蘇市自然体験活動推進条例」や「機構活性化プラン」、「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」及び「子供の貧困対策に関する大綱」等に伴う事業を実施し、施設の独自性を打ち出した取組を行ってまいりました。



令和3年度 国立阿蘇青少年交流の家教育事業の柱

1 青少年教育に関するモデル的事業

関係機関・団体や国公立青少年教育施設、大学の研究者等と連携した上で、報告書を通して広く青少年教育関係者へ発信する。実践研究事業は、本年度テーマを定め、事業のねらいに対応した実践研究を大学の研究者等と協働で行い、青少年のための専門性の高いモデル的体験活動を取り組むことなどに留意して事業を実施し、令和4年度に報告書を作成する。地域の実情を踏まえたプログラム事業（特色化事業）は、企画段階から営家機関・団体等と連携して実施し、青少年のための専門性の高いモデル的体験活動を取り入れ、使用した教材や指導案などの学習方法が活用されるように工夫し、第四期中期目標期間内に冊子の作成やフォーラムなどを開催する。全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」は、連携学校と協議の上、カリキュラム内容に留意しながらオリエンテーション合宿を実施し実施する。

2 社会の養成等に応える体験活動事業

社会の要請に応える体験活動を推進するために、親子や幼児等を対象に自然体験や読書活動などに親しむ教育事業、青少年を対象に自己成長や自己実現等を図る教育事業、防災学習や環境学習などのESDに対応した教育事業を実施する。

3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

基本的な生活習慣の確立や人間関係系勢力などを育成する体験活動事業を、児童養護施設に入所する児童と不登校などの課題を抱える青少年を対象として実施する。

4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

青少年に良質な体験活動の機会と場を提供するためには、質の高い指導者を養成することが必要不可欠である。ナショナルセンターとして、人づくり、つながりづくり、地域づくりという側面に留意した教育事業を展開する。

5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

子供たちの体力低下をはじめ、学力や規範意識の低下、高校生の読書離れが進んでいる傾向が指摘されている中、子供たちの知・徳・体のバランスの取れた成長に大切な様々な体験活動や基本的な生活習慣の重要性を普及するため、青少年教育団体等と連携して「体験の風をおこそう」運動及び「早寝早起き朝ごはん」国民運動を連動させて取り組み、全国各地における体験勝殿機械や場を充実させるとともに、青少年の基本的な生活習慣の確立を目指す。

令和3年度国立阿蘇青少年交流の家教育事業実績一覧

1 青少年教育に関するモデル的事業

(1) 実践研究事業

「阿蘇山一周 100 kmチャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～」【担当：有木園】

- ・期日：8月8日（日）～8月14日（土）
- ・対象及び参加人数：小学5年生～中学3年生（24名）

(2) 地域の実情を踏まえたプログラム事業（特色化事業）

「ジュニアジオガイド講座 ①②③④」【担当：佐藤】

- ・期日：① 9月 4日（土）～9月 5日（日） ②10月 2日（土）～10月 3日（日）
③10月30日（土）～10月31日（日） ④11月13日（土）～11月14日（日）
- ・対象及び参加人数：小学5～6年生（26名）

(3) 全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」

「オリエンテーション合宿（第1学年）」【担当：岡嶋】

- ・期日：令和3年4月28日（水）～令和4年3月16日
- ・対象及び参加人数：阿蘇中央高等学校1年生（普通科、総合ビジネス科）

「オリエンテーション合宿（第2学年）」【担当：林】

- ・期日：令和2年6月10日（水）～令和3年9月29日（水）
- ・対象及び参加人数：阿蘇中央高等学校2年生（普通科）

「九州沖縄ブロック地方ステージ」【担当：佐藤】

- ・期日：12月26日（日）グループ部門 12月27日（月）個人部門
- ・対象及び参加人数：書面審査で本部が決定した高校生（28名）

2 社会の要請等に応える体験活動等事業

(1) 防災・減災教育事業

「あそ防災キャンプ」【担当：佐藤】

- ・期日：2月11日（金）～2月12日（土） **新型コロナウイルス感染拡大のため中止**
- ・対象：中学生、高校生

(2) 環境教育や人権教育などの政策課題に対応した教育事業

「阿蘇の草原キッズになろう！ ①秋編・②野焼き編」【担当：有木園】（子どもゆめ基金20周年記念事業）

- ・期日：①10月16日（金） ②1月中旬～2月下旬
- ・対象及び参加人数：阿蘇郡市内小学生（①66名 ②161名）

(3) グローバル人材育成を見据えた国際交流事業

「阿蘇っ子わくわくグローバルキャンプ」【担当：有木園】（子どもゆめ基金20周年記念事業）

- ・期日：12月11日（土）～12月12日（日）
- ・対象及び参加人数：小学5年生～中学1年生（34名）

3 課題を抱える青少年を支援する体験活動事業

「チャレンジウインターキャンプ in ASO」【担当：林】

（生活・自立支援キャンプ）

- ・期日：1月9日（日）～1月10日（月） **新型コロナウイルス感染拡大のため中止**
- ・対象及び参加人数：児童養護施設に入所する幼児～高校生

「新しい自分を見つけよう！きらりキャンプ in 阿蘇」【担当：林】

- ・期日：11月6日（土）～11月7日（日）
- ・対象及び参加人数：心に悩みをもつ小学生～中学生及び保護者（5名）

4 青少年教育指導者等の養成及び資質の向上に関する事業

(1) 教員免許状更新講習

「教員免許状更新講習」【担当：岡嶋】（熊本大学主催）

- ・期日：7月27日（火）～7月28日（水）
- ・対象及び参加人数：教員免許状を有する者（13名）

(2) ボランティアの養成事業

「阿蘇ボランティア入門塾①②」【担当：有木園】

- ・期日：①7月10日（土）～7月11日（日） ②9月18日（土）～9月19日（日）
- ・対象及び参加人数：ボランティア活動に興味のある高校生～大学生（①52名、②18名）

(3) ボランティアによる自主企画事業

「登竜門へ踏み出そう ～つくりあげよう、私たちのボランティア～」【担当：有木園】

（大学生のためのボランティア活動推進事業「自主企画事業支援プロジェクト」）

- ・期日：12月18日（土）～12月19日（日）
- ・対象及び参加人数：ボランティア活動に興味のある高校生～大学生（12名）

5 地域ぐるみで「体験の風をおこそう」運動推進事業

「星空観察会①②」【担当：①戸越、②岡嶋】

（親子・幼児等を対象に自然体験や読書活動などに親しむ機会と場を提供する事業）

- ・期日：①7月10日（土）～7月11日（日）
②1月29日（土）～1月30日（日） **新型コロナウイルス感染拡大のため中止**
- ・対象及び参加人数：幼児、小学生、保護者（35名）※1回目のみ

「親子で仲良く！アドベンチャーキッズ」【担当：岡嶋】

（親子・幼児等を対象に自然体験や読書活動などに親しむ機会と場を提供する事業）

- ・期日：9月25日（土）～9月26日（日）
- ・対象及び参加人数：幼児とその保護者（20名）

「親子の交流広場①②③」【担当：①西川、②戸越、③尾中】

（親子・幼児等を対象に自然体験や読書活動などに親しむ機会と場を提供する事業）

- ・期日：①11月23日（火）、②12月4日（土）、③12月18日（土）
- ・対象及び参加人数：幼児、小学生、保護者（①5家族14名、②4家族11名、③3家族8名）

「阿蘇ふるさとづくり未来塾」【担当：岡嶋】

（青少年を対象に体験活動を通じた自己成長や自己実現を図る事業）

- ・期日：12月3日（金）～12月5日（日）
- ・対象及び参加人数：阿蘇市の小学校6年生（13名）

「子どもゆめ基金説明会」【担当：尾中・戸越】

- ・期日：熊本会場9月16日（木）・大分会場9月24日（金）
- ・対象及び参加人数：青少年を対象にした体験活動を提供するNPO等の民間団体等（①12名、②13名）

「早寝早起き朝ごはん」キャラバン出前講座【担当：戸越】

- ・期日：12月13日（月）～12月23日（木）
- ・対象及び参加人数：513名（小学校5、幼稚園1、保育園4）

「Sea サマーキャンプ」【担当：林】

（課題を抱える青少年を支援する体験活動事業）（熊本県国公立青少年教育施設連絡協議会連携事業）

- ・期日：7月22日（木）～7月24日（土）
- ・対象及び参加人数：球磨村の小学4～6年生（31名）

教育事業の実際

阿蘇山一周チャレンジキャンプの3年間の実践

I. はじめに

平成8年(1996)、第15期中央教育審議会は「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」¹⁾の中で、「生きる力」をはぐくむことが重要であるとする第1次答申を行い、21世紀の我が国の教育において「生きる力」の育成が重視されてきた。橘ら²⁾は自然体験事業の評価を目的として、「生きる力」の構成概念を明らかにするために、「生きる力」を構成する指標について検証した。その中で、「生きる力」は心の能力を構成する「心理的社会的能力」と「徳育的能力」に加え、「身体的能力」の大きく3つの指標で構成されていることを報告している。山川³⁾により、自然体験活動は参加者の「生きる力」の育成に有効であること、4泊5日以上プログラム期間を設定することによって「生きる力」、とりわけ「心理的社会的能力」の効果的な育成につながることが明らかになっている。

一方で、近年の都市化、核家族化の進行により、身近な知人や親戚のいない社会的環境での子育てが多くなっており、長期自然体験活動に子供を預けるが、不安から様子を見に来る保護者の姿が多くみられる。庄司⁴⁾は、母と子のより良い関係について「会わない時間」をつくることが意味を持つと示唆している。「会わない時間」こそ、母子が互いの存在を見直し、母親としての自己、子どもとしての自己を見つめなおす機会となる。馬場⁵⁾らは、部分的ではあるが、組織キャンプ体験後に母親からのサポート感が好意的に変化することを明らかにしている。

そこで、まず本事業においても「生きる力」が同様に育成されるのかを明らかにするとともに、子供がどのようなプロセスで成長していくかについて一定の結論を出していきたい。同時に、会わない時間における親の心情の変化のプロセスについても明らかにして、子供の「生きる力」の育成との関連についても明らかにしていきたい。

II. 事業について

1. 対象事業

- (1) 2019年 阿蘇山一周チャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～
小学5年～中学3年 24名参加
- (2) 2020年 阿蘇山一周 100km チャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～
小学5年～中学3年 22名参加
- (3) 2021年 阿蘇山一周 100km チャレンジキャンプ ～大草原からの贈り物～
小学5年～中学3年 24名参加

2. 事業の概要について

自然環境に恵まれた「阿蘇」の大地をフィールドとした長距離ハイキングを通して、参加者が同じ目的をもった仲間とともに困難に挑戦し、最後までやり遂げる力を育むとともに、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣を身につけることを目指して、本事業を設定した。

小学5、6年、中学生の男女で構成された6人チームで、1日ごとに設定されたゴールまで歩き、その場所でテント泊を繰り返しながら交流の家を目指した。年度毎のプログラムの特徴は以下のとおりである。

表1 年度毎のプログラムの特徴

2019年	【期間と目標】 5泊6日で阿蘇山一周（64km）を目指す。 【主な内容】 1日目：移動なし。オリエンテーションを行う。 2、3日目：自転車での移動2日 4～6日目：徒歩での移動 【移動のルール】 チーム行動を原則としているが、全チームと一緒に移動する。 【チーム編成】 移動するチームとは異なるメンバーでテント泊をした。 【天候による変更点】 台風のため1日遅れでスタートすることになり、2日目の行程を中止し、4泊5日で阿蘇山一周（48km）を目指すこととなった。
2020年	【期間と目標】
2021年	6泊7日で100kmを目指す。 【主な内容】 1～6日目：徒歩での移動 7日目：移動なし。片付け、振り返りを行う。 【移動のルール】 チーム行動を原則とし、ペースや休憩配分もチームに任せた。 【チーム編成】 移動するチームと同じメンバーでテント泊をした。 【天候による変更点】 2020年は、雨と霧のため3日目の行程を一部省略し、92kmを目指すこととなった。 2021年は、台風や大雨の影響で、1日以外は交流の家でのテント泊となった。屋外を70km歩いたところで続行不可能になり、参加者の判断で残り30kmは交流の家館内を歩き100km達成。

2019年の取組より、チーム内における人間関係やゴールした時の達成感が十分でなかったという反省から、2020年に大きく内容を変更した。「徒歩で100km」という大きな目標を設定したことに加え、参加者がより主体的にキャンプに参画できるような内容に変更した。

Ⅲ. 取組の実績及び結果、考察

1. 医学的見地からの安全管理

(1) 取組の実績

過酷な長期キャンプにおける参加者の体調管理等の安全管理を徹底するために、医学的見地よりサポートを受け実施判断等の根拠にした。

表2 3年間の医学的見地からのサポート

2019年	・県看護協会より派遣された看護師が移動中に帯同する。
2020年	・救護スタッフが移動中に帯同する。
2021年	・看護師経験のある救護スタッフが移動中に帯同する。

表2の体制で毎年の安全管理を行い、特に食事管理、熱中症対策、新型コロナウイルス対策について以下のことに配慮した。

① 食事管理

朝早くから歩き始め、毎日8時間近く歩く行程であるため、100kmを踏破するためのエネルギーを十分に摂取することができるようカロリー摂取量を計算した。行程上、朝食はパン2つとゼリー、昼食は弁当と交流の家のレストランメニューで固定していたため、行動食と夕食で足りないカロリーを補えるようにした。疲労時でも食べやすい行動食を選び、参加者及び各チームの学生スタッフに持たせ休憩時間ごとに少しずつ食べさせた。また、夕食については地域団体の南阿蘇ファームキャンプと連携し、必要なカロリーとともに長期キャンプで摂取が困難なたんぱく質を補い、疲労時にも食べやすい献立を組み立てた。

② 熱中症対策

命にかかわる熱中症については最も配慮し、看護師経験のあるスタッフと相談し次のような対策で予防に努めた。

- ・看護師経験のあるスタッフが救護班として同行し、常時参加者の体調を把握する。
- ・毎朝活動前に経口保水ゼリーを飲む。
- ・早朝から活動を開始し、気温の低いうちに行程を進める。
- ・移動中はマスクを外す。
- ・30分おきに水分補給する。
- ・11時から15時の間は気温が高くなることが予想されるため、計画上涼しい場所で休憩する。ただし、その日の状況を気象庁のホームページや黒球式熱中症指数計を参考に、救護スタッフと相談し活動可能と判断した際には歩くことにする。

③ コロナ対策

コロナ対策については、2週間前からの体調確認、食事前の手洗いうがいの徹底や移動時以外のマスク着用など一般的な対策を徹底するとともに、テント宿泊時には5人用テントに3人が宿泊し、足を一か所に集め扇形に開くような形で寝るようすることで、互いの距離を確保し感染防止に努めた。

(2) 結果及び考察

医学的見地からのサポートもあり3回の長期キャンプにおいて大きな事故はなく、過酷なキャンプにおいても安全管理を徹底するという大前提を守ることができたといえる。途中、個人判断やスタッフ判断で救護車に乗るというケースはあったものの、60名の参加者全てがゴールテープを切ることができた。特に2020年、2021年は新型コロナウイルス対策と並行して熱中症対策をすることができた。

表3 3年間の主な疾病

年	主な傷病
2019年	・特になし
2020年	・虫刺され
2021年	・発熱

2. IKR分析による生きる力の変容(2019年)

(1) 調査方法

「生きる力」の変容を明らかにするため、橘ら²⁾が開発した「IKR評価用紙」を用いて調査を行った。この評価用紙は、生きる力を構成する「非依存」「積極性」「明朗性」「交友・協調」「現実肯定」「視野・判断」「適応行動」「自己規制」「自然への関心」「まじめ勤勉」「思いやり」「日常的行動力」「身体的耐性」「野外技能・生活」の14の下位指標(表4)についてそれぞれ5項目(そのうち一つは逆転項目)、計70項目から成る。各項目は、「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の6段階で回答を求め、「とてもよくあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点とし、事前(キャンプ前)、事後(最終日)、追跡(1か月後)の3回で調査分析を行った。

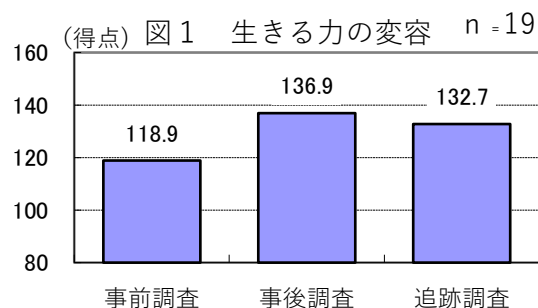
表4 生きる力を構成する指標

上位指標	中位指標	下位指標
生きる力	心理的社会的能力	①非依存
		②積極性
		③明朗性
		④交友・協調
		⑤現実肯定
		⑥視野・判断
		⑦適応行動
	徳育的能力	⑧自己規制
		⑨自然への関心
		⑩まじめ・勤勉
		⑪思いやり
	身体的能力	⑫日常的行動力
		⑬身体的耐性
		⑭野外生活・技能

「とてもよくあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点とし、事前(キャンプ前)、事後(最終日)、追跡(1か月後)の3回で調査分析を行った。

(2) 結果及び考察

分析の結果、上位指標の「生きる力」や、中位指標の「心理的社会的能力」、「身体的能力」については、事前-事後、事前-追跡ともに向上し有意差が見られた。「徳育的能力」については有意差が見られなかった。山川³⁾と同じ結果になったため、本事業においても同様に生きる力が育成されることが明らかになった。



3. 歩行時のルールとチーム成長のステージに合わせたスタッフの対応（2020、2021 年）

（1）取組の実際

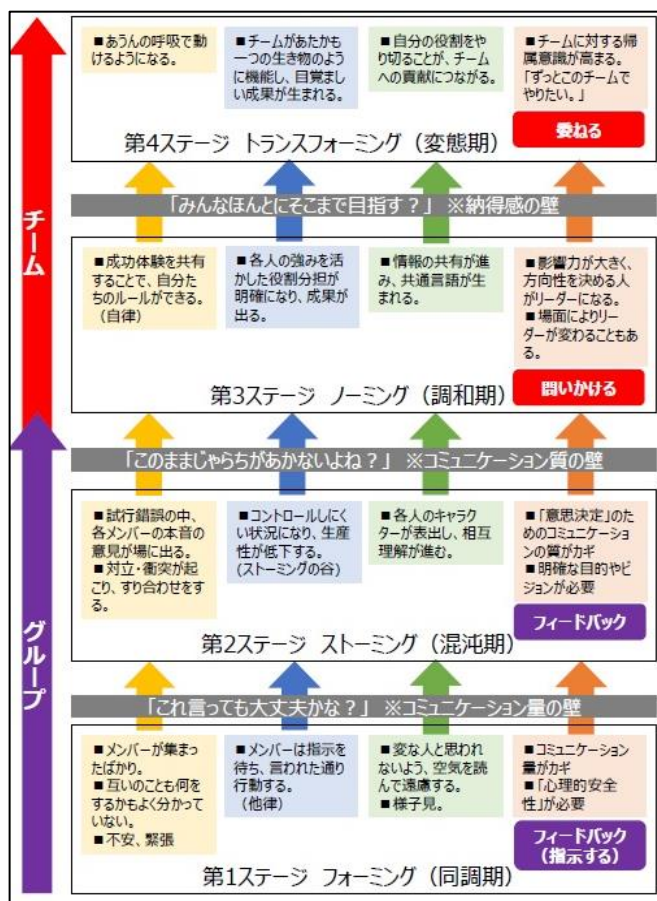
チーム行動を原則としているものの全チームでまとまって歩行した 2019 年は、チームとしての成熟に課題が残ったため、2020 年以降歩行時のルールを大きく変更した。安全面以外では「チーム全員で行動すること」の一点のみを定め、それ以外のことは全て子供に委ね、参加者に主体性をもたせることにした。

～チームに委ねたこと～

- ・チームリーダーの有無
- ・朝食をとる時刻、場所
- ・歩く時の並び順、歩くペース
- ・休憩のタイミング ※水分補給は 30 分ごと（スタッフが管理）
- ・歩けないメンバーが出たときの判断

スタッフの関わり方についても、指示することが多かった 2019 年から変更し、堀ら⁶⁾のいうファシリテーターとしての立ち振る舞いを学生も含めたスタッフで共有した。また、長尾⁷⁾⁸⁾によるチーム成長のステージを意識した関わりについて、子供たちが自ら高まっていけるよう図 1 の資料を全スタッフで共有した。チーム成長のステージは、出会ったばかりの「同調期」、互いの意見がぶつかり合う「混沌期」、一人一人の役割が明確になり成果の出る「調和期」、チームが一つの生き物のように機能する「変態期」の 4 段階で構成される。特に子供たちに近い位置にいる学生スタッフには各ステージにおける関わり方の違いや立ち位置の変化等細部まで確認し事業に臨んだ。

図 2 チーム成長のステージ



出典：長尾彰『宇宙兄弟 今いる仲間であまういくチームの話』

（2）結果及び考察

多くを子供たちに委ね、チーム成長のステージに合わせた対応の在り方をスタッフで共有することで、キャンプ期間における子供たちの変容がより明らかになった。

2020 年の印象的な事例について以下に述べる。5 日目まで 1 番目か 2 番目でゴールし続けていた D チームが 6 日目に大きくペースを落とした。ハイペースを続けたため

一部のメンバーの疲労がたまり、最終ゴールで1番を目指すかどうかでチームが分裂したことが原因だった。それまでリーダーを誰にするか等で混沌期や調和期を行ったり来たりしているように見えたDチームだったが、順調だった歩行ペースに問題が生じ、移動最終日ということもありゴール直前で深い混沌期に入ってしまった。昼食場所に先頭から1時間以上遅れてDチームが到着し、ゴールまでの行程について説明が終わり、準備ができたチームから出発することになった。既に準備を終え、いつでも出発できる状態3チームとは対照的に、Dチームは昼食を食べ終わっていない人もいたような状態だった。3チームが一斉に1番の最終ゴールを目指して動き出すと思ったが、トイレに行ったり、なかなか戻ってこなかったりしている間に、Dチームが最初に出発し最初にゴールテープを切った。Dチームとしては混沌期の段階であったが、全体としては変態期にまで高まったことが実感できた瞬間だった。

2021年は、悪天候が続く中なんとか70kmまで歩いた段階で、大雨警報が発令され、それ以上屋外を歩くことができなくなった。100km踏破が絶望的になる中、参加者の一人からの「屋外がダメなら、屋内を歩いてでも100km歩きます。」という言葉に、100kmチャレンジを続けるか否かの決定が参加者に委ねられることとなった。話し合いは2時間たっても結論が出なかった。「100km達成を目指したい」という意見と「疲弊したい仲間を考えると無理に目指すべきではない」という意見が対立したためだった。驚くことに、前者を主張したのは、それまでに救護車に乗り100km踏破賞の資格のない子、疲労が限界に近づいていて100km達成が困難な子で、反対に、後者を主張したのが、体力的に問題なく100km達成が現実的な子供たちだった。2時間以上の話し合いの結果、チーム成長のステージにおける納得感の壁を越え変態期に入ったことともたちの結論は、「室内を歩いて100kmを目指す。しかし、チームの状態次第で棄権することもあり得る。」だった。その後、全チームが室内を歩き100kmを達成した。

同長期からできるだけ早く混沌期へ移り、調和期を目指すことを共通の目的としており、変態期までは特に目指していなかった。しかし、部分的ではあるものの、2年連続で変態期の様子が確認され、参加者に委ね主体性を持たせることでチームとして成長することが明らかにされた。

3. 自己肯定感の変容（2020年）

（1）調査方法

2020年には、能登青少年交流の実践である青少年の体験活動の推進「体験活動推進プロジェクト」自己肯定感向上プロジェクトを参考に自己肯定感の変容を調査した。調査にあたり「自己決定」「自己存在感」「共感的人間関係」の3つの下位指標についてそれぞれ3項目、計9項目で

1日ごとの変容を調査した。各項目は「よくあてはまる」から「あてはまらない」の4段階で回答を求め「よくあてはまる」を4点、「あてはまらない」を1点とした。

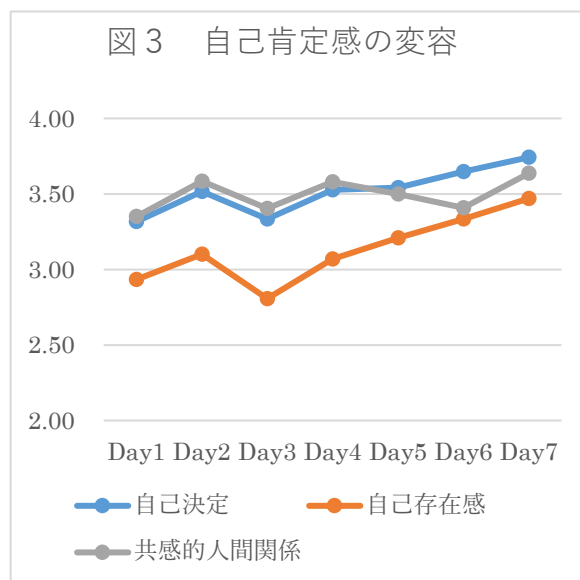
表5 自己肯定感を構成する指標

上位指標	下位指標
自己肯定感	自己決定
	自己存在感
	共感的人間関係

(2) 結果及び考察

調査の結果、日を追うごとに自己肯定感が高まっていく様子が確認された。3日目に全ての値において減少傾向があるが、これは雨や霧のため移動距離が約 15km 短縮されたことや、その日の夜に 100km に到達できないことが判明したこと、これまでの疲れが出たことなどが原因として推測される。

特に変化が大きかったのが自己存在感で、初日や3日目に平均3点未満だったものが、4日目以降次第に上昇し、最終日は初日と比べて平均で 0.54 上昇した。自己決定については初日からやや高く、緩やかに上昇し最終日は初日より 0.42 上昇という結果だった。一番変化が少なかったのが共感的人間関係で、最終日と初日の差は 0.29 であった。5日目、6日目と数値が下がったのは、疲労がたまっていく後半において、ペース配分や休憩の取り方についてチーム内で意見が分かれたことが原因と考えられる。



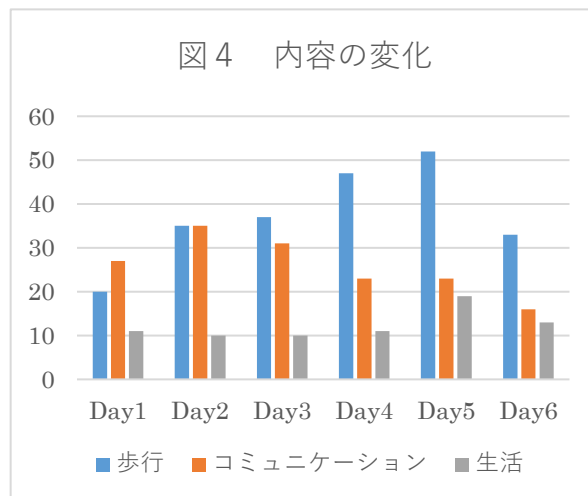
4. KPT による意識の変容 (2021 年)

(1) 調査方法

2021 年には、天野⁹⁾によるチーム改善のためのフレームワークを参考に、毎日の振り返りの時間に次の3項目について自由記述形式で記録に残すようにした。「がんばったり、うまくいったりして続けたいこと (Keep)」、「がんばれなかったり、うまくいかなかったりしたこと (Problem)」、「明日から挑戦したいこと (Try)」の3項目について参加者が記入し、それぞれに書かれている対象と内容の変化から参加者の意識の変容をとらえることとした。

(2) 結果及び考察

内容の変化より、初日については、コミュニケーションに関する内容が多かった。このことから、初日は歩行以上にコミュニケーションに関する意識が高いといえる。全体的にみると歩行についての内容が最も多く、ゴールの日に向けて日毎に増加していった。このことから、キャンプ初日はまず、チーム内のコミュニケーションに重点が置かれ、チーム内のコミュニケーションに対して



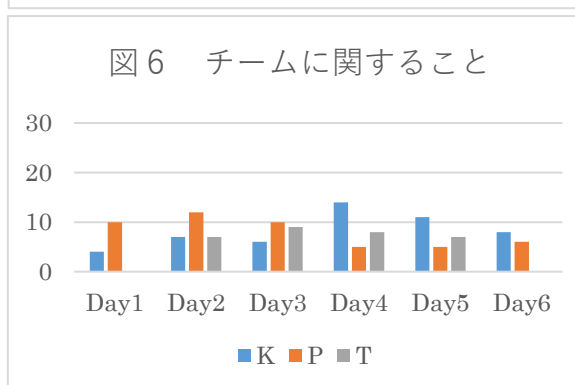
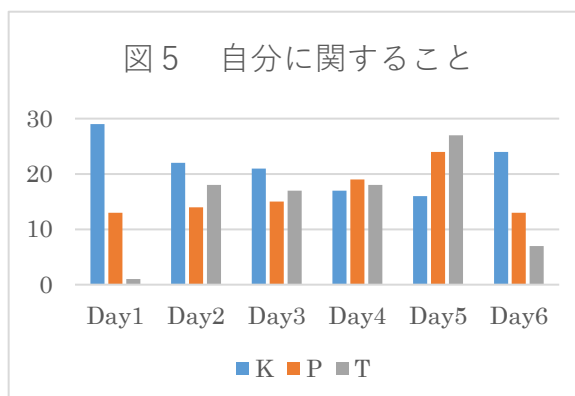
不安がなくなってくると、100km という目標達成のために次第に意識を高めていくと推測される。生活面に関する記述については、前半、テント設営をできるかというこ

とや食事を食べきれるかといった衣食住に関する記載が多かった。後半は時間を守ることや言動というように、集団の中における自分の在り方についての記述へと変化していった。

対象別に分析すると、自分に関することが最も多く、チームに関することがその半分くらいで日毎の差は見られなかった。KPT ごとに詳細を見ると、「Keep (できたこと、続けたいこと)」は、自分に関することが減少し、チームに関することが増加する傾向となった。反対に「Problem (課題)」は、チームに関することが減少傾向にあり、自分に関することが増加傾向にあるという結果が出た。

このことから、キャンプ前半においては、自分の成果とチームの課題への意識が強く、後半にかけてチームの成果と自分の課題へと意識が変化していき、日を追うごとに、チームの中での自分の役割についての意識が強くなっているといえる。そのため、「Try (挑戦)」は自分に関することが日毎に増加していくこととなった。

また、5日目、6日目には、全体を対象とする記述も一部ではあるがみられ、自分からチームへ、そして全体へと意識が広がっていくと考えられる。



5. 保護者の変容

(1) 調査方法

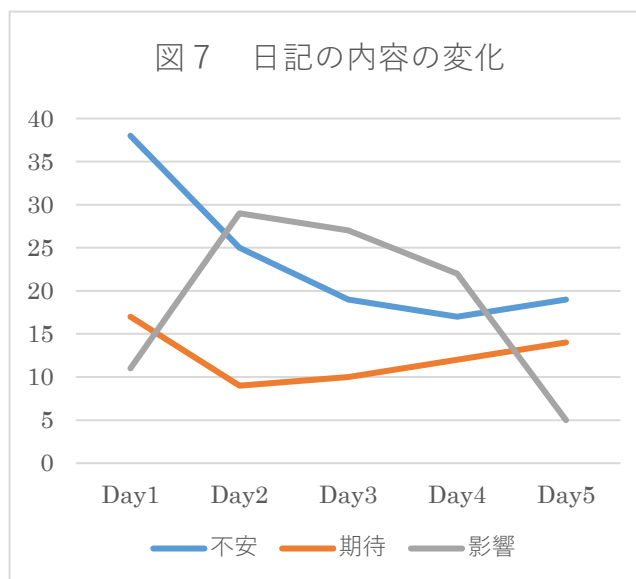
保護者の変容については 2021 年に次のようなワークショップ形式の保護者プログラムを実施し、キャンプ期間中の日記をつけてもらった。

◆保護者プログラム① (顔合わせ、自己紹介) ・キャンプに参加させたきっかけ、不安に思うこと	事前説明会 (1週間前)
◆保護者プログラム② (親の学びプログラム) ・長期自然体験活動に子供を参加させる親の心構え ・7日間親子が会わないことの意義 ・7日間の体験を終えて親が子にできること	キャンプ初日
◆保護者プログラム③ ・この7日間親として何を考えていたか ・今回の事業を漢字一文字で表すとすると	キャンプ6日目 100km ゴールを見届けた後

この中で、今回は日記の内容による変容より分析することとした。日記に書かれている内容から、子供に対する期待や希望に関すること、子供に対する不安や心配に関すること、家に子供がいないことによる影響の3つを抽出した。

(2) 結果及び考察

不安や心配に関することについては初日に最も高く、2日目、3日目と次第に減り、その後大きな変化は見られなかった。中でも「忘れ物はないか」「身の回りのことをきちんとできているか」「友達に迷惑をかけていないか」といった子どもの生活に関することの変化が、初日に高く、次第に減少した。一方で子供の体力面や歩行に関するものは初日から最終日まで大きな変化がなかったことから、特に子供の生活に関する不安や心配が1日目から3日にかけて減少しているといえる。



期待や希望に関することについては、初日が最も多く、キャンプ最終日への期待を表す内容だった。2日目に大きく減少し、次第に増加する傾向にあった。

家に子供がいないことによる影響については、2日目から4日目が多く、書かれた内容は以下のようなものだった。

【子供がいないことによる影響の主な内容】

- ・子供（参加者）以外の家族の変化
- ・子供（参加者）以外の家族と触れ合う時間が多かったことでの新たな気づき
- ・家族における子供（参加者）の役割への気づき
- ・子供（参加者）がいないことで感じる寂しさ
- ・家族の話題が子供（参加者）の過去や現在の話題になる。

これらのことから、保護者は、子供がいることが当たり前の状態において子供のできないところに目が行く傾向が強く、会わない時間を通してできないことからできることへと意識が変化し期待が高まっていくことが推測される。会わない時間の中で、家族における子供の役割を再認識したり、子供が何かをできたことを想起したりすることが要因として考えられる。実際に、数人の保護者の日記にも同様の内容が気づきとして書かれていた。

IV. 結論及び今後の展望

今回の調査の結果、長期キャンプにおいて、子供たちはまず自らのコミュニケーションの課題を克服し、その後チームでの目標達成のために自分がどうあるべきかと意識を変えながらキャンプに臨んでいることがわかった。チームのために自分がどうあるべきか試行錯誤しながら、自己存在感を感じ、自己肯定感を高め、生きる力を身につけていくことが明らかになった。その際、子供たち自身に可能な限り主導権を渡し、目標達成に向かっていく際の様々な意見の対立が子供たちの成長に大きく関わっていくことも分かった。キャンプが過酷になるほど安全管理の重要度は増していくため、医学的見地

からのアドバイスがより必要になる。

保護者においては、長期間子供と会わない時間の中で、家族の中での役割を再確認したり、子供の良いところを思い出したりする。そのことにより、普段子供と一緒にいるときにはできないことに目が向きがちな状態から、期待や希望といった前向きな印象をもつことが明らかになった。

今回の実践で、子供たちが生きる力を身に着けていくプロセスや保護者の意識の変容について明らかになったため、今後、事業後における、保護者のかかわりの変化とそれに伴う子供の生きる力との関連性を明らかにしていく必要がある。

引用文献・参考文献・注

- 1) 中央教育審議会『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）』1996.
- 2) 橘直隆、平野吉直『生きる力を構成する指標』『野外教育研究』第4巻第2号 2001. pp.11-16.
- 3) 山川晃「自然体験活動が参加者の『生きる力』に与える影響－メタ分析による検討－」『野外教育研究会』第22巻第2号 2019.pp.17-30
- 4) 庄司一子「母と子の良い関係とは－現代における特徴と危機－」『児童心理、児童研究会』第56巻第8号 pp.741-750
- 5) 馬場亜紗子、西田順一、橋本公雄、柳敏晴、中島俊介「組織キャンプ体験が母子関係に与える影響－ソーシャルサポート感の変化に注目して－」『野外教育研究』第8巻第1号 2004.pp.87-95.
- 6) 堀公俊、加留部貴行『教育研修ファシリテーター』中央精版印刷株式会社 2010.
- 7) 長尾彰『宇宙兄弟 今いる仲間であまくいく チームの話』株式会社学研プラス 2019.
- 8) 長尾彰『宇宙兄弟「完璧なリーダー」は、もういない』株式会社学研プラス 2018.
- 9) 天野勝『これだけ！KPT』株式会社すばる舎リンケージ 2013.

事業名 ジュニアジオガイド講座（全4回）

【主催】	国立阿蘇青少年交流の家
【共催】	環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所 阿蘇火山博物館 阿蘇ジオパーク推進協議会
【後援】	熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会
【期 日】	第1回 令和3年10月 2日（土）～10月 3日（日）【1泊2日】 第2回 令和3年10月30日（土）～10月31日（日）【1泊2日】 第3回 令和3年11月13日（土）～11月14日（日）【1泊2日】 第4回 令和3年11月20日（土）～11月21日（日）【1泊2日】
【活動場所】	国立阿蘇青少年交流の家及び阿蘇ジオパーク
【参加者】	小学5年～6年生 26名
【講師】	第1回 池辺 伸一郎 氏 （阿蘇火山博物館 館長） 第2回 宮本 利邦 氏 （阿蘇市教育委員会 学芸員） 豊村 克則 氏 （阿蘇火山博物館 学芸員） 山本 捺由他 氏 （環境省阿蘇くじゅう国立公園管理事務所 係員） 第3回 児玉 史郎 氏 （阿蘇ジオパークガイド協会 理事） 第4回 児玉 夏子 氏 （阿蘇市経済部観光課 主事）
【阿蘇ジオパーク協会ジオガイド】	11名（全4回各班担当 5名／第1回実験担当 6名）
【協力団体】	第1回 垂玉温泉瀧日和・温泉センターウィナス 第2回 阿蘇神社・国造神社・阿蘇淡水魚センター・阿蘇ホテル二番館・株式会社日本リモナイト阿蘇鉱業所 第3回 京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター 第4回 阿蘇大観峰茶店
【担当職員】	8名 【法人ボランティア】 4名

1. 趣 旨

阿蘇ジオパークを地域教材として活用することで、郷土と自然を愛する態度の育成を図るとともに、問題解決学習を通して科学的思考力と課題解決能力、自ら学ぶ意欲を育成する。さらに、阿蘇ジオパークの情報を発信することで、幅広い知識と表現力を育成する。また、ジオパークに関する仕事をしている人々の思いや願いを聞く場を設定し、自らの将来について考える機会をつくる。

2. 目 標

- （1）全4回参加した児童のすべてがジュニアジオガイドとしてのガイド体験を実施することができる。
- （2）事後のアンケートで、8割以上が「阿蘇ジオパークや阿蘇のよさ、すばらしさに気づくことができた」「自然のよさ、すばらしさに気付くことができた」と回答する。
- （3）事後のアンケートで、8割以上が「実際に探検したり、実験や観察をしたりすることが好きになった」「仲間と協力することができた」と回答する。

3. 事業展開

研修プログラム

【第1回】10月 2日（土）～ 3日（日）『阿蘇は、生きている』を体感しよう！』

見学地 火山博物館/中岳火口/南阿蘇湧泉群/垂玉温泉/立野峡谷/新阿蘇大橋

講 話 「阿蘇ジオパークについて」

【第2回】10月30日（土）～31日（日）「火山の恵みと人々の営みとの関係を探ろう！』

見学地 阿蘇神社/水基めぐり/国造神社/上御倉・下御倉古墳/中通古墳群/内牧温泉/大観峰/ 阿蘇黄土

講 話 「火山に関する仕事をしている方の講話」「国立公園・草原について」

【第3回】11月13日（土）～14日（日）「火山やカルデラの雄大さを体感しよう！』

見学地 大観峰/京都大学火山研究センター

講 話 「ガイドのコツ講座」

【第4回】11月20日（土）～21日（日）「阿蘇ジオパークの魅力を伝えよう！』

見学地 大観峰（ガイド体験）/二重の峠

講 話 「ジオに関する仕事をしている方の講話」

【第1回】



中岳火口見学の様子

【第2回】



上御倉古墳見学の様子

【第3回】



大観峰見学の様子

【第4回】



ガイド練習の様子



噴火実験の様子



講話の様子



原稿作成の様子



ガイド体験の様子



垂玉温泉見学の様子



阿蘇黄土見学の様子



火山センター見学の様子



二重の峠見学の様子

4. 成果と課題

(1) 成果

- 目標に上げていた3つの項目すべてで目標値を100%達成できた。
 - (1) 大観峰ガイド体験 全4回参加 25名中25名実施 (学校行事で不参加 1名)
 - (2)・(3)はそれぞれの質問で「とても思う」「思う」の回答数。
- 児童の感想からは「ガイド体験という貴重な経験ができた」「いろんなところに行っている発見をしたら面白かった」「阿蘇についてたくさん学べた」など、事業全体への高い満足度がうかがえた。また、「さらに自分の地域のすごいところや不思議なところを探してみたい」「色々なことにチャレンジして、もっと自信が持てるように頑張る」「これから学校でもたくさん発表したい」など、今回の経験を今後にかそうとする意欲が高まっている様子もうかがえた。
- 大観峰ガイド体験のテーマ(ゴール)を「阿蘇ジオパークの魅力を伝えよう」と設定したことで、最終回までの各ジオサイト見学の意味づけがより明確になった。
- 第2回開催時、昨年度ジュニアジオガイド講座を受講した5名のガイドを聞く場を設けた。受講後の活動の場を提供できたとともに、本年度受講者へのガイドへのイメージづくり、意欲付けにもなり、大変良かった。プロのジオガイドの方々からも好評だった。
- コロナや中岳噴火による見学地変更と、当初の計画通り進めることはできなかったが、新たな見学地の開拓につながった。(垂玉温泉、京都大学火山研究センター)
- 全4回すべてに同じ学生スタッフが関わってくれたことで、参加児童との信頼関係が強まっただけでなく、学生の児童へのかかわり方にも最初は遠慮がちな対応だったが、徐々に自信をもって対応できるようになるなど変化や成長が見られた。

(2) 課題

- 「全4回参加できること」を条件としていたが、実際にはコロナの関係で学校行事が流動的になり、途中参加や早退が相次いだ。今後も募集時点で行事が定まっていない学校が多いのであれば、条件を見直し、参加を希望する児童がすべて申込できるようにした方がよい。
- ガイド体験を終え、ガイドすることや阿蘇やジオパークへの興味関心が高まっている。今後の活動の場をどのように保障するか、ジオガイド協会とも連携を取っていきたい。

事業名 オリエンテーション合宿 1年生

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 熊本県教育委員会
 [期 日] 令和3年4月28日(水)～令和4年3月16日(水)
 [活動場所] 主に熊本県立阿蘇中央高等学校 阿蘇校舎 他
 [参加者] 阿蘇中央高等学校 普通科・総合ビジネス科 1年生 58名
 [協力団体] 阿蘇ジオパーク推進協議会 鍵山 恒臣 氏
 阿蘇門前町商店街振興協会 岩永 芳幸 氏
 WakuWaku Office あそ Be 隊 薄井 良文 氏
 桜プランニング 渡邊 裕介 氏
 株式会社日本リモナイト 田中 利宣 氏
 [担当職員] 3名

1. 趣 旨

新学習指導要領に定められた「総合的な探究の時間」の目標等に基づいた研修会を実施するとともに、生徒が地域で行う探究活動を顕彰することで、生徒一人一人が社会の担い手となって社会の成長につながる新たな価値を創造する人材になることを支援する。

2. 事業展開

	科目名	実施日
1	ガイダンス	4月28日
2	講話等「地域づくりの実践」	5月12日～7月14日
3	フィールドワーク①「地域の魅力を発見」	10月27日
4	講義・演習「地域理解」	9月22日
5	講義・演習「課題解決の基礎」	10月20日
6	フィールドワーク②「地域課題の探究」	11月10日
7	講義・演習「地域課題の探究」	11月17日～12月8日
8	発表①	12月15日
9	講義・演習「行動計画の基礎」	12月22日
10	発表②	3月9日
11	実践活動のためのガイダンス	R4年6月実施



【ガイダンス】



【商店街店主の話を聴く生徒】

3. 成果と課題

(1) 成果

- 実施する毎に、問題意識をもって「調べる」「聴く」「話し合う」姿が活発になってきた。また、探究テーマを議論したり、体験活動を行ったりする中で、地域の素材を生かした新たなものを創り出そうとするなど、地域課題の解決に向けて新たな価値を見出そうとする姿があった。

(2) 課題

- 交流の家の「地域探究プログラム」と阿蘇中央高校の「総合的な探究の時間」との連携が必要不可欠であるため、指導計画等の細かな年間計画作成等が必要である。

事業名 オリエンテーション合宿 2年生

- [主 催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後 援] 熊本県教育委員会
 [期 日] 令和2年6月10日（水）～令和3年9月29日（水）
 [活動場所] 主に熊本県立阿蘇中央高等学校 阿蘇校舎 他
 [参加者] 阿蘇中央高等学校 普通科 2年生 54名
 [協力団体] 阿蘇ジオパーク推進協議会 鍵山 恒臣 氏（1年生時 講話）
 阿蘇ジオパーク協会 児玉 史郎 氏（1年生時 講話）
 株式会社日本リモナイト 田中 利宣 氏（1年生時 講話、フィールドワーク）
 公共財団法人 阿蘇火山博物館 （フィールドワーク）
 熊本地震震災ミュージアム（フィールドワーク）
 ※その他にも各グループ単位で様々な団体の協力を得た。
 [担当職員] 3名

1. 趣 旨

新学習指導要領に定められた「総合的な探究の時間」の目標等に基づいた研修会を実施するとともに、生徒が地域で行う探究活動を顕彰することで、生徒一人一人が社会の担い手となって社会の成長につながる新たな価値を創造する人材になることを支援する。

2. 事業展開

	科目名	実施日
1	ガイダンス（1年生時）	6月10日
2	講話等「地域づくりの実践」	6月17日～9月16日
3	フィールドワーク①「地域の魅力を発見」	10月7日
4	講義・演習「地域理解」（1年生時～2年生時）	11月4日～7月16日
5	講義・演習「課題解決の基礎」	12月23日、1月23日
6	フィールドワーク②「地域課題の探究」	夏季休業中
7	講義・演習「地域課題の探究」	9月8日
8	発表①	2月28日
9	講義・演習「行動計画の基礎」	9月15日
10	発表②	9月22日
11	実践活動のためのガイダンス	9月29日



【実践活動に向けてのガイダンス】



【阿蘇火山博物館でのFW】

3. 成果と課題

（1）成果

- OR 合宿で学習のサイクルを学ぶことにより生徒が見通しをもって学習に取り組むことができた。そのようなことから意欲的に実践活動に取り組む生徒が多く、地方ステージに6グループ進んだ。

（2）課題

- 生徒の学びの充実を更に図るために、より細かい打ち合わせや学校のニーズの収集が必要である。

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」
九州・沖縄ブロック 地方ステージ

- [主 催] 国立阿蘇青少年交流の家
- [後 援] 熊本県教育委員会
- [期 日] 令和3年12月26日(日)～12月27日(月) 【日帰り2日間】
- [活動場所] 本会場 : 国立阿蘇青少年交流の家 大研修室
リモート会場 : 国立大隅青少年自然の家 福岡県立筑豊高等学校
国立諫早青少年自然の家
- [参 加 者] 本会場 グループの部 熊本県立阿蘇中央高等学校 19名
個人の部 熊本県立阿蘇中央高等学校 1名
リモート会場 グループの部 福岡県立筑豊高等学校 6名
個人の部 志學館高等部 1名/福岡県立筑豊高等学校 1名
- [評価委員] 二木 信輔 氏(岡山県立玉島商業高等学校 校長)
岡村 誠也 氏(熊本県立教育センター 副所長)
川並 満徳 氏(国立阿蘇青少年交流の家 所長)
- [担当職員] 本会場 4名 リモート会場 各1名
- [ボランティア] 本会場 4名

1. 趣 旨

新学習指導要領に定められた「総合的な探究の時間」の目標等に基づいた研修会を実施するとともに、生徒が地域で行う探究活動を顕彰することで、生徒一人一人が社会の担い手となって、社会の成長につながる新たな価値を創造する人材になることを支援する。

2. 目 標

- (1) 出場者の発表を評価・審査し、全国ステージに出場するブロック代表者を選出する。
- (2) 事後アンケートで8割が、「自身の探究活動を見直すことができた」と回答する。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

1日目		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
グループの部	12月26日(日)	参加者 評価委員	受付 アイスブレイク 打合せ	開会式	プレゼン発表	昼食・休憩	プレゼン発表	グループワーク 審査	閉会式	解散

2日目		9:00	10:00	11:00	12:00	13:00
個人の部	12月27日(月)	参加者 評価委員	受付 アイスブレイク 打合せ	開会式	プレゼン発表	グループワーク 審査 閉会式 解散

(2) 活動の様子



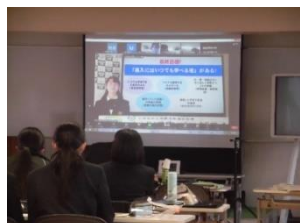
【アイスブレイクの様子】



【質疑の様子（本会場）】



【発表の様子（本会場）】



【発表の様子（リモート）】



【グループワークの様子（1日目）】



【グループワークの様子（2日目）】



4 成果と課題

(1) 成果

- 評価委員に県立教育センターからお招きしたことで、今後の探究活動において、県と協力、連携して取り組んでいくきっかけとなった。
- コロナの感染状況を考えて、計画段階からリモートで実施する方向で進めていたので大きな混乱はなかった。
- 実施後のアンケート項目「自分自身の探究活動を見つめなすことができた」で、「そう思う(66.7%)」「ややそう思う(33.3%)」と回答した。また、「高校生でこんなことをしている人がいると発見でき、たくさん学ぶことができた」「自分の課題も見つかり、自己分析するよい機会となった」「より地域課題について深められた」「地方ステージの場で発表したことで、さらに深い活動ができたと思いうれしかった」などの記述があり、地方ステージを経験したことが生徒にとって大きな学びになっていることが分かった。
- アンケートの自由記述では「阿蘇のことをより深く知ることができてよかった」「これからは阿蘇についてもっと色々な人々に広めていきたい」「阿蘇を離れる時が来ても、自分のできることをみつめていきたい」などの記述があり、自分が育った地域について知るだけでなく、地域社会の一員としての視点を持ち始めており、本事業の趣旨に沿った学びができている様子が伺えた。

(2) 課題

- 書面審査対象となる「実践活動報告書」の形式や実践日数のカウント方法、プレゼン発表の評価基準の在り方(特に時間制限)について改善の必要があり、来年度に向けて修正が必要である。
- オンラインで実施する場合、参加者の不利にならないように通信状況やマイクの状況の改善工夫が必要である。
- アンケート項目「プレゼン発表に満足できたか」の問いに対し、26.7%の生徒が、「やや不満」と回答している。理由として「準備不足だった」「質疑応答に迷った」などの意見の他、「他校の発表のレベルが高かった」「他県の発表者の質疑の受け答えが上手だった」などの意見もあったことから、次年度はより自信をもって発表や受け答えができるように、出場決定後、本番までの間に模擬的な練習会などの手立ての必要性を感じた。

事業名 阿蘇の草原キッズになろう！ ①秋編

[主催]	国立阿蘇青少年交流の家
[共催]	阿蘇草原再生協議会 公益財団法人阿蘇グリーンストック
[後援]	阿蘇市教育委員会 高森町教育委員会
[期日]	令和3年10月15日(金)～10月16日(土) 1泊2日
[活動場所]	阿蘇青少年交流の家 町古閑牧野(箱石峠側) 小堀牧野
[参加者]	阿蘇市立一の宮小学校4年生 84名 引率4名
[講師]	市原 啓吉 氏(町古閑牧野組合長) 藤原 健太郎 氏(町古閑牧野組合員) 田島 今朝信 氏(小堀牧野組合長)
[担当職員]	5名
[ボランティア]	阿蘇グリーンストック野焼きボランティア4名

1. 趣 旨

阿蘇郡市内の子供たちに、阿蘇の草原環境の現状を学ばせると共に、草原維持活動(野焼き)を実際に体験させることで、草原環境保全への意識を向上させる。

また、野焼きに携わる人々との出会いを通して、いろいろな生き方・考え方に気づかせ、地域を愛し、地域をよりよくしようとする心を育成する。

2. 目 標

- (1) 参加者の8割が、互いの協力の中で、体験活動に「満足」を感じる。
- (2) 参加者の8割が、野焼きの果たす役割や、阿蘇の人々のライフスタイルへの関心をもつ。
- (3) 阿蘇の草原の現状を知り、参加者の8割が草原環境を守っていくための自分の考えをもつ。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00																						
10月15日（金）				バス移動	開会式	草原紙芝居①	草原ビンゴ	バス移動	昼食	草泊まりについての講話	草泊まり作り			オリエンテーション・休憩	部屋移動・休憩	夕食	エサづくり	入浴	草原紙芝居②	振り返り	就寝準備	就寝

7:00 8:00 9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00 17:00 18:00 19:00 20:00 21:00 22:00																								
10月16日（土）		起床	洗面	朝食	部屋の片づけ	退所点検	あか牛エサやり	あか牛メッセージ	あか牛についての講話	閉会式	退所													

(2) 活動の様子



【草を使って何ができる？】



【草原の植物を探せ】



【わらを運ぶぞ】



【味噌団子は粘土みたい】



【味噌団子おいしい？】



【牛の背中モフモフ】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 参加者の86%が満足（やや満足まで含めると97%）というアンケートからの結果で、事業の目的を達成することができた。
- 「野焼きについてもっと知りたくなった」「人と草原とあか牛の昔からの助け合いが分かった」「草原や牛などはたくさんの人に大切に守られていると初めて知った」などの感想から、野焼きの果たす役割や阿蘇の人々のライフスタイルへの関心を高めることができた。
- 「草原が減ってきているから、残さないといけないということに気づいた」「これからも草原をつなげていき、日本全体が詳しく知ってほしいと思った」「阿蘇の自然の大切さに気付かされた」等の感想が複数見られ、草原環境を守っていくための自分の考えをもちつつある様子がうかがえた。
- 一の宮小学校の先生と連携し、総合的な学習を意識した上で、プログラムを設定したことで、既習内容との関連付けができ、より深い理解へとつなげることができた。

(2) 課題

- 全体的にスケジュールがタイトで、4年生の行動スピードでは困難である。プログラムを精選したり、移動を少なくしたり、2日目を昼過ぎまで実施したりするなどの工夫が必要。どのプログラムも魅力的であり、土曜授業を絡めた日程を変更することは難しいという先生方の意見もある。
- 草泊まり作り体験は、大勢の児童が一斉にできることが少なく、間を持て余す様子も見られた。草泊まり作り体験のプログラムとあか牛のエサづくりを同時に行い、ローテーションする等の工夫が必要である。
- 牛を怖がる児童が多いので、エサやりの際には先生方の言葉かけや促しが必要である。
- 先生が手続きや児童対応に追われ、プログラムに関われなかった部分があったため、施設利用に係る手続きや、その間の児童対応、緊急時対応など、改めて職員と先生方の役割分担を見直すとともに十分な打ち合わせが必要である。

事業名 阿蘇っ子 わくわく グローバルキャンプ

[主催]	国立阿蘇青少年交流の家
[後援]	熊本県教育委員会
[期日]	令和3年12月11日(土)～12月12日(日)【1泊2日】
[活動場所]	国立阿蘇青少年交流の家
[参加者]	阿蘇郡市等の小学5・6年、中学1年生 34名
[講師]	James Cooly (産山村教育委員会) Lee Cockerhom (南阿蘇村教育委員会) Daniele Niki (鹿屋市教育委員会) Izumi Inamori (鹿屋市教育委員会) Glen Ray Mrkusich (垂水市教育委員会) Preston Chong (肝付町教育委員会) Jane Mae Kojima (南大隅町教育委員会)
[担当職員]	4名
[ボランティア]	5名

1. 趣 旨

多様な文化をもつ人々と交流することで、異文化理解の増進を図るとともに、自分の住んでいる地域や郷土熊本に誇りをもつことができるようにする。

多様な文化をもつ人々とジェスチャーや英語を使って交流し、互いが意思疎通を図ることの意義を感じることで、英語学習に興味を持ち、主体的に学び続ける意欲を高めることができるようにする。

2. 目 標

- (1) 参加者の8割が、異文化や郷土への関心をもつ。
- (2) 参加者の8割が、日本語の通じない相手とのコミュニケーションをとることの大切さを感じる。
- (3) 参加者の8割が、英語学習への関心をもつ。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
12月11日(土)					受付	(英語説明) 入国審査	昼食	野外調理(ピザ) (日本語説明→英語翻訳)		異文化交流 (英語説明) (日本語説明)	入所オリエンテーション	入浴	就寝準備			消灯

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
12月12日(日)		朝の起床準備	朝食	部屋点検	チャレンジゲーム (英語説明) (日本語説明)	昼食	(英語説明) 出国審査	解散								

(2) 活動の様子



【キンドリングクラッカーで薪割り体験】



【Let's go to ニュージーランド】



【チャレンジゲームで課題クリア】



【ドキドキの出国審査（閉会式）】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 県主催のイングリッシュキャンプの視察や、ALT派遣を依頼する等、県教育委員会と連携することで、「英語教育日本一」を目指す熊本県と同じ目的での企画運営ができた。
- キャンプ全体を通して、参加者の全員が外国の人とコミュニケーションをとる必要性や、英語への興味の高まりについて、高まった（28）、やや高まった（3）と回答し、目標を十分に達成することができた。特に、「英語を理解するプログラム」と「日本語で理解した内容を英語やジェスチャーで伝えるプログラム」のバランスを考慮しながら活動を設定したことで、「日本語を英語に訳したり、ジェスチャーで伝えたり、様々な英語を聞いたりして、この単語はどういう意味なのかと気になった」「英語がわからなくてもジェスチャーでわかるから興味が高まった」「もっとしたい、知りたいということが増えた」等、参加者からの感想が上がった。
- 異文化交流のプログラムにおいて、様々な国のALTに話をしてもらったことや、阿蘇について日本語で聞いたことをジェスチャーや英語でALTに伝える活動が効果的だった。その結果、参加者の全員が色々な文化への理解が深まり、郷土阿蘇に誇りをもつことについて、できた（22）、ややできた（8）と回答し、目標を十分に達成することができた。
「国によって文化が違うことがわかった。そして、自然がたくさんある阿蘇を大切にしていきたい」「どの国にも文化があり、みんなふるさとがあるから深まりが重なった」「やはり阿蘇は面白いと思った」等の感想からも、目標の達成がうかがえた。

(2) 課題

- 教育委員会との調整、当日の出欠、活動内容の理解や、その他の様々な手続きに等、ALTとの調整に時間がかかり、熊本県のALTを2名しか集めることができなかった。次年度は本年度のつながりを生かし、早い段階からALTとの調整をはじめ、可能であればすべて熊本のALTで講師をそろえられるとよい。

事業名 新しい自分を見つけよう！きらりキャンプ in 阿蘇

〔主催〕	国立阿蘇青少年交流の家
〔後援〕	熊本県教育委員会
〔期 日〕	令和3年11月6日（土）～11月7日（日）（1泊2日）
〔活動場所〕	国立阿蘇青少年交流の家
〔参加者〕	小学生、中学生、高校生各1名と保護者2名
〔講師〕	登校拒否・不登校に学ぶフレンズ ネットワークくまもと 江藤 恵子 氏 小堀牧野組合長 田島 今朝信 氏
〔担当職員〕	4名
〔ボランティア〕	4名（法人ボランティア1名 熊本大学実習生3名）

1. 趣 旨

自然体験を通して、心の悩みをもつ青少年に自然体験の楽しさや達成感を感じさせ、自己有用感を育む。また、交流の家での生活を通して、規則正しい生活の良さや友達と交流する喜びを感じさせ、基本的な生活習慣づくりのきっかけになるようにする。

2. 目 標

- （1）参加者全員が、自然体験活動を楽しめたと感ずることができる。
- （2）参加者全員が、野外調理で達成感を感じることができる。
- （3）参加者全員が、自己有用感を感じることができる。

3. 事業展開

（1）研修プログラム

時刻	11月6日（土）	11月7日（日）
6:00		起床・清掃・準備
7:00		○阿蘇の空からながめてみよう！ （熱気球体験）荒天のため中止
8:00		朝食・休憩
9:00		○あか牛にふれてみませんか？
10:00		休憩・活動準備
11:00		○大自然の中でクッキング （焼きそばづくり）
12:00		後片付け・休憩 みんなでふりかえろう（保護者は茶話会） 閉会・解散
13:00		※雨天時は、室内での活動 クラフト等を予定しております。
14:00	受付	
15:00	開会・アイスブレイキング	
16:00	○千年の大草原で遊ぼう！	
17:00	休憩	
18:00	入浴・夕食	
19:00	休憩・活動準備	
20:00	○室内で遊ぼう！！ ○調理に向けて話し合い	
21:00	保護者 座談会	
22:00	就寝準備 就寝	
23:00		

(2) 活動の様子



【千年の大草原でオリエンテーリング】



【あか牛とふれあおう】



【みんなで薪を割ろう】



【焼きそばづくりクッキング】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 参加者全員が「楽しかった」と答えている。自然活動等、様々な活動を満喫することができたと思う。(アンケート(2)①から)
- 参加者全員が野外調理で「みんなで協力してうれしかった」と答えている。試行錯誤しながらも完成した喜びや達成感を味わうことができたと思う。(アンケート(1)⑤から)
- 「新しい友達ができうれしかった」等の感想があった。参加者が積極的にコミュニケーションを図る場面が数多く見られた。
- 「親子でいい時間を過ごすことができた。いい企画なので告知をもっとしてほしい」、「主体的に動く子どもの姿が見られてとてもうれしかった」等、参加保護者の方々から肯定的な感想をいただくことができた。

(2) 課題

- 本年度も参加者が少ない現状であった。参加者を増やすための工夫が更に必要である。
(各通級教室や施設等单位での活動も考える)
- 荒天で参加者が楽しみにしていた気球に乗ることができなかった。荒天時でも楽しみにできるプログラムを再検討する。
- 野外調理等、危険を伴う活動もあるので事前の道具点検や場所の整備、手順を追って安全に使用するための説明を確実に行うことが大切である。
- 広い範囲で周知できるように広報活動の工夫を図る。(SNS等を使って)

事業名 教員免許状更新講習

[主催] 熊本大学

[共催] 国立阿蘇青少年交流の家

[後援] 熊本県教育委員会

[期 日] 令和3年7月27日（火）～7月28日（水）

[活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家

[参加者] 小学校・中学校・高等学校の教員13名

[講師] 中川 保敬 氏（元熊本大学教授）
 秋山 洋 氏（国立阿蘇青少年交流の家）
 有木園 和志 氏（国立阿蘇青少年交流の家）
 佐藤 倫子 氏（国立阿蘇青少年交流の家）

[担当職員] 2名

1. 趣 旨

集団における体験活動の教育的意義や必要性について理解し、集団宿泊学習を実施する際のプログラム立案や安全管理、指導上の留意点についての知識・理解の向上を図り、学級経営や生徒指導に生かせるようにする。

2. 目 標

- （1）発達段階に応じた体験活動の必要性を知るとともに、アイスブレイクの手法や野外調理を通して、指導技術や安全管理、集団宿泊学習における指導方法を習得する。
- （2）オリエンテーリングの実践について体験し、自然体験活動の効果や指導上の留意点、企画・立案及び安全管理の実践について学ぶ。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
7月27日（火）			オリエンテーション 受付	【講義】 『教育課程と体験活動の関連性』 元熊本大学教授 中川 保敬	昼食	【実習】 『自然体験活動と仲間づくり』 阿蘇青少年交流の家 有木園 和志	【実習】 『野外調理の実践』 阿蘇青少年交流の家 有木園 和志	入所式	入浴・自由時間 ※希望者には「星空観察」	就寝							
7月28日（水）		起床	朝食 片づけ 退所点検	【実習】 『オリエンテーリングの実践』 阿蘇青少年交流の家 佐藤 倫子	昼食	【講義・演習】 『集団宿泊学習の計画・立案と安全管理』 阿蘇青少年交流の家 秋山 洋	認定試験	解散									

(2) 活動の様子



【自然体験活動と仲間づくり】



【野外調理の実際】



【オリエンテーリングの実際】



【集団宿泊学習の計画・立案と安全管理】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 事後アンケートの結果から、「これまで体験活動の意義を深く考えずに行っていたが、『何のために、どんな活動を仕組むのか』という意識をもって計画を立てることの重要性を再認識することができた」「実際に活動場所を歩くことで、『ここは危ない』『こんなところに気を付けてほしい』という視点で、安全面に配慮することの大切さを感じることができた」「どうしても行事をこなすことに一生懸命だったが、理論を学び指導に取り組むことの大切さを実感した」「レクリエーションでは、『名前を呼び合うことで恥ずかしいという気持ちを乗り越える』という段階を踏んだアイスブレイクの流れが参考になった。また、何を身に付けさせたいのかという目的意識をはっきりさせることが大切だと感じた」等の感想があった。本講習のねらいが達成できたことがわかる。

(2) 課題

- 「オリエンテーリングは高校の生徒を対象にした場合、ポイントを探すだけでなく、ポイントにもう一工夫仕組めばよいと感じた」「実際に自分が体験してみて、指導の難しさを再認識することができた」等の感想があり、活動がマンネリ化しないように、もう一工夫できるところは今後に向けて手を入れ改善していかなければならない。

事業区分 青少年教育指導者等への養成事業
事業名 阿蘇ボランティア入門塾①②

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
[後援] 熊本県教育委員会
[期日] 1回目：令和3年7月10日（土）～7月11日（日）【1泊2日】
2回目：令和3年9月18日（土）～9月19日（日）【1泊2日】
[活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
[参加者] 1回目：52名（大学生20名 高校生32名）
2回目：18名（大学生9名 高校生9名）
[講師] 高見 大介 氏（日本文理大学人間力育成センター長）
薄井 良文 氏（Waku Waku OFFICE あそBe隊 代表）
秋山 洋 氏（国立阿蘇青少年交流の家次長）
[担当職員] 4名
[ボランティア] 1回目：2名 2回目：4名

1. 趣 旨

青少年教育施設におけるボランティア活動の基礎を培い、ボランティアとしての態度や能力を育成する。

2. 目 標

- (1) 30名以上のボランティア登録を確保するとともに、登録者がその後の活動に積極的に参加する。
(2) 事業への満足度4点満点中平均3.5以上と回答する。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
1 日 目							受付 開 会 式	講義① 青 少 年 教 育	演習① 「ボランティア活動の技術 オリエンテーション」	講義② ボランティアの意義	夕食	演習② 「ボランティア活動の技術 チャレンジゲーム」	ふり 返 り ・ 入 所 O R	入 浴	就 寝 準 備	就 寝

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
2 日 目	就 寝	起床、準備 演習③ボランティア活動の技術（体操）	朝食	退 所 点 検 演習④ボランティア活動の技術（清掃）	講義・演習① 安全管理		昼 食	講義③ の青 少 年 教 育 現 状 と 運 営	講義④ に青 少 年 教 育 活 動 を 通 じ た 交 流	閉 会 式	解 散					

(2) 活動の様子



【日本文理大での広報】



【青少年教育】



【真剣に聴く参加者】



【オリエンテーリング】



【ボランティア活動の意義】



【チャレンジゲーム】



【安全管理】



【グループディスカッション】



【阿蘇ボラ誕生】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 昨年度のうちから企画運営ボランティアを募り、広報計画を立て、チラシ、ポスター、動画を作成するとともに、大学での講義の時間を使つての広報の結果、多くの方に集まってもらふことができた。
- 「自分から行動していきたいと思った」「参加者第一に動いていてすごいと思った」等、ボランティアが運営に携わることで、ボランティア活動の実際を見ることがき、ボランティア活動へのイメージをもたせることができた。
- 「他の活動を実際に聞いて、ボランティアに対する考え方が大きく変わった」「堅苦しいイメージだったが、そうでないことが分かった」等、青少年教育施設におけるボランティアの講義の中で、実際に活動するボランティアの体験談を聴いたり、グループディスカッションの時間に先輩ボランティアが不安や悩みを解消することで、参加者の「自分もやってみたい」という気持ちを高めることができた。
- 事業の後半くらいから、参加者に対し、参加者としてではなく法人ボランティアの仲間として接することを意識した運営をしたり、登録証を発行したりすることで、次のボランティア活動への意欲を高めることができた。

(2) 課題

- 人数が予想以上に増えたことで、当初予定していた送迎バスが出せず、参加者には迷惑をかけた。次年度以降、バスでの送迎や、年間2回開催について検討する必要がある。

事業名 登竜門へ踏み出そう ～つくりあげよう、私たちのボランティア～

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家

[期日] 令和3年12月18日（土）～12月19日（日）【1泊2日】

[活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家

[参加者] 高校生3名 大学生9名 計12名（うち法人ボランティアは7名）

[担当職員] 3名

[ボランティア] 11名

1. 趣 旨

法人ボランティアや興味のある学生がコミュニケーションをとり、互いの中を深め、楽しく活動できる環境をつくるとともに、アイスブレイク等の技術を高めることで、これからのボランティア活動での連携や質を高められるようにする。

2. 目 標

- （1）事業全体の満足度平均3.5以上を目指す。
- （2）参加者の8割が、次回からのボランティア活動への意欲を高める。
- （3）運営ボランティアの満足度平均3.5以上を目指す。

3. 事業展開

（1）研修プログラム

- 企画書づくりに向けてのオンラインミーティング（全8回）
（8月4日,6日,10日,14日,22日,24日,27日,28日）
- 当日運営に向けての打ち合わせ
11月 7日（日） 顔合わせ、プログラム全体の概要について
11月27日（土） 役割分担、プログラム詳細について
12月15日（水） 行動細案確認（オンライン）

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
12月18日（土）							受付	開会式	活動① アイスブレイク研修 チーム目標設定 アイスブレイク練習	入所OR	夕食	活動② アイスブレイク研修 ボランティア活動の実際	入浴	就寝準備	消灯	

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
12月19日（日）		朝の起床準備	朝食	退所点検	活動③ アイスブレイク研修 チャレンジゲーム	昼食		活動④ アイスブレイク研修 チャレンジゲーム 振り返り	閉会式	解散						

(2) 活動の様子



【2日間のチームや個人の目標】



【事業別ボランティア活動の情報交換】



【持ち寄ったアイスブレイク紹介】



【2日間だけどかけがえのない出会い】

4. 成果と課題

(1) 成果

- ボランティアが中心となって事業を企画・実施することでボランティアとしての資質の向上を図ることや、阿蘇ボランティアの活動紹介など、阿蘇ボランティア育成ビジョンに基づいた活動として充実させることができた。
- 参加者の事業全体への満足度については、参加者全員が満点であったため、十分に目標を達成できたといえる。参加者からも「たくさんの仲間と交流することができた」「とにかく楽しく、皆優しくて年齢を問わずフレンドリーに話せた」「参加者にも考える機会が多く与えられていてとてもよかった」等の感想が挙げられた。
- 「自分が今度ボランティアとして参加する側のとき、どう説明すればよいのかよく分かった」「知らない活動もあったので、いろいろなものに行きたいと感じた」等、今後の活動への意欲についても、参加者全員が満点であり、十分に目標を達成できた。
- 運営ボランティアの事業全体に対する満足度の平均は3.6で目標を達成することができた。「初対面の集団が運営のちょっとした工夫で仲を深め、協力できる集団になるための段階的なアプローチ方法を学べて本当に勉強になった」「参加前の自分から大きく成長でき、運営スタッフとして当日まで関わってよかった」等の感想が上がった。

(2) 課題

- 企画から当日まで11名の法人ボランティアが運営として関わったが、当日に参加できたのはそのうち5名だったため、先に事業当日の日を決めてから募集する等、最後までかかることができるよう工夫する必要がある。
- オンラインでのミーティングは今後重要になってくると思うので、オンラインミーティングの中で自由に言い合えるような手立てについても職員が身に付けていく必要がある。

事業名 星空観察会 ～天の川編～

- [主 催] 国立阿蘇青少年交流の家
- [後 援] 熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会
- [期 日] 令和3年7月10日(土)～7月11日(日)
- [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
- [参 加 者] 35名(参加申込数:740名)
- [講 師] 平塚 勝一 氏(所属:産山村教育委員会)
- [担当職員] 2人
- [ボランティア] 3人

1. 趣 旨

他機関や各種団体との連携を図り、阿蘇の星空観察を通して自然の素晴らしさを味わう機会とする。
また、当交流の家を地域の方々に開放することで、身近に利用できる施設として周知を図ることで理解につなげる。

2. 目 標

- (1) 阿蘇の星空観察を通して自然の素晴らしさを味わい、体感する。
- (2) 家族で交流の家を利用することで、研修支援での家族の利用へ繋げ、体験活動の促進を目指す。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

	7月10日(土)		7月11日(日)
17:00	【宿泊者受付】(17:00～)	7:00	起床(6:30)
18:00	入所OR※(17:30～)	8:00	朝食
19:00	夕食・入浴(18:00～)	9:00	宿泊室の清掃・退所点検
20:00	【日帰り受付】(19:00～)	10:00	退所
21:00	星空観察会(19:30～) (雨天時:星座のお話、ダジック・アース等)	11:00	
22:30	振り返り・アンケート	12:00	

※入所OR…宿泊に関する施設の利用方法の説明をします。

(2) 活動の様子



【星座早見盤作成】



【星座早見盤の使い方】



【星に関する絵本の読み聞かせ】



【天体解説】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 荒天ではあったが、参加者からは概ね満足の回答を得ることができた。
- 前半のクラフトの時間では、低年齢の参加者は別に絵本の読み聞かせを実施し、年齢層に合わせたプログラムを提供でき、参加者からも好評であった。
- 星空体験会をととして、「星空の観察にいい条件（光害やPM2.5等の影響が少ないなど）」と「星空と参加者の居住している地域の違い」を意識させ、SDGsについても身近な問題と感じさせることができた。
- 法人ボランティア2名は初参加者だったが、それぞれ役割を与えることで十分な達成感を感じることができた。

(2) 課題

- 参加者の年齢幅があると、低年齢の参加者には難しくなってしまった。低年齢の参加者がいる場合は、その対象に合わせたプログラムに変更したり、募集段階で参加対象年齢を絞るなど対応が必要。
- 宿泊者の入浴・食事のスケジュールがタイトすぎた。計画当初には団体がいなくても、実施段階では他団体もいることがあるので、食事、入浴時間は最低2時間設定する必要がある。

事業名 親子で仲良く！アドベンチャーキッズ

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家（企画運営 熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会）

[後援] 熊本県教育委員会

[期 日] 令和3年9月25日（土）～9月26日（日）【1泊2日】

[活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家

[参加者] 幼稚園・保育園年長児9名、小学生4名、保護者8名

[講師] 田木 祐一郎 氏（阿蘇教育事務所）

内藤 聖子 氏（阿蘇市図書館） 坂梨 仁奈 氏（阿蘇市図書館）

薄井 良文 氏（研修指導員） 高橋 雅巳 氏（研修指導員）

[担当職員] 9名（内ボランティア3名）

1. 趣 旨

自然を活用した遊びを中心とする運動プログラムを提供し、幼児期における体力の重要性を周知することで、幼児の「健康に関する体力（けがの防止等）」「運動に関する体力（全身を使った多様な動き等）」の向上を図り、日常での外遊びにつなげる。また、運動プログラムを親子で協力して行うことで、親子のコミュニケーションを深める。

「親の学びプログラム」を活用して子育ての情報交換を行うことで、子育てへの不安解消、意欲向上につなげる。

2. 目 標

- （1）全身を使った運動遊びをすることを通して、8割の子供たちが体を動かすことの心地よさを実感できるようにする。
- （2）体を動かすことを通して、8割の子供たちが自分の体力に合った技の習得をできるようにする。
- （3）忍者者修行を通して、8割の子供たちが体力の向上に目を向けることができるようにする。

3. 事業展開

（1）研修プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
9月25日（土）			受付	開会式	読み聞かせ	忍者になる準備をしよう	昼食	忍者修行 その一		ドラム缶風呂	休憩	夕食	忍者修行 その二 親の学びプログラム		入浴	就寝
9月26日（日）	起床	整理・準備	朝食	退所点検	忍者修行 その三	昼食	こども忍者認定式	解散								

(2) 活動の様子



【忍者修行 その1 綱渡りの術】



【湯あみの術 ドラム缶風呂体験】



【忍者修行 その3 薪割り】



【こども忍者認定式】

4. 成果と課題

(1) 成果

- ルールを守りながら友達と一緒に忍者修行や宿泊を経験することで、物事のやりとりや仲間への接し方を学ばせることができた。
- 綱渡りや木登り等の自然を活用した遊びを通して、子供たちが諦めずに物事に挑戦しようとする姿を伸ばすことができた。
- 忍者修行の技を通して学んだことを生かして、休憩時間には自分たちで遊びを考えて体力向上に意識を向けさせることができた。
- 講話を通して親同士が学ぶことができ、子育てについて新たな気づきをすることができた。

(2) 課題

- 「忍者になる準備をしよう」について、1時間の中で、「手裏剣・手甲・頭巾・忍者服」の4つを制作するには時間が短すぎた。忍者グッズを4つも制作せずに、3つにしばるべきだった。
- 昼間の「忍者修行」の活動について、前半4つ・後半4つの活動を行ったが、子供達が活動するには時間がタイトであり、活動を急がせる形になってしまった。前半3つ・後半3つに活動を絞り、子供たちの活動の時間を確保する必要がある。

事業名 親子の交流広場

- [主 催] 国立阿蘇青少年交流の家
- [企画・運営] 熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会
- [期 日] ① 第1回 令和3年11月23日(火・祝)
② 第2回 令和3年12月4日(土)
③ 第3回 令和3年12月18日(土)
- [活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家
- [参加者] 阿蘇郡市在住の幼児・小学生を含む家族
- [講 師] 第1回 横田 浩 氏(熊本県フライングディスク協会 会長)

1. 趣 旨

新型コロナウイルス感染症等により子供達の体験活動の機会が減っていることを踏まえ、家族単位で気軽に参加できる日帰りイベントを実施する。また、自然体験活動に馴染みがなく不安を持つ家族であっても、容易に体験できるパッケージプログラムを提供することで、体験活動に興味・関心を持ってもらう一助とする。

2. 目 標

- (1) 各回参加の家族が他の家族と交流しながら楽しい一日を過ごす。
- (2) 事後のアンケートで8割以上から「満足」の評価を得る。
- (3) 地域の団体・個人と連携して、家族対象の事業を実施する。
- (4) 新たなプログラム(3つ)の試行を実施する。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

①11/23(火・祝) ディスクゴルフ体験、薪割り&火起こし体験

- 10:15~12:00 ディスクゴルフ体験
12:00~13:00 昼食&休憩
13:00~15:00 薪割り&火起こし体験

②12/4(土) 初めてのテント設営、たき火&焼きいも

- 10:15~11:15 テント設営
11:15~12:00 昼食&休憩
12:10~14:00 たき火&焼き芋
14:00~14:50 テントの片づけ

③12/18(土) 枝を使ったオリジナルフォーク作り、たき火&焼きリンゴ

- 10:15~12:00 フォークづくり
12:00~12:45 昼食&休憩
13:00~14:50 たき火&焼きリンゴ

(2) 活動の様子



【フライングディスク体験】(11/23)



【焼き芋体験】(12/4)



【手作りフォーク体験】(12/18)



【焼きリンゴ体験】(12/18)

4 成果と課題

(1) 成果

- アンケートの結果、参加者の8割以上から「満足」の評価を得ることができた。
特に、今回のような日帰りイベントだけでなく、テント泊体験や星空観察会等の宿泊イベントの需要が高いことが分かった。
- 第1回においては、熊本県フライングディスク協会と連携した事業を実施することができ、今後の事業連携につなげることができた。
- 新たなプログラムを3つ（焼き芋、手作りフォーク、焼きリンゴ）実施することができた。

(2) 課題

- 新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、当初予定していた施設開放イベントの代替として、急遽、本事業を開催することとした。そのため、他の地域のイベントや土曜授業の期日と重複し、参加者が募集定員に満たなかった。地域イベントや学校行事等のリサーチが必要である。
- 家族利用ができるということを初めて知ったという家族もあり、今後、さらに家族利用について、周知していく必要がある。具体的には、子育て支援センターや図書館等、家族や子供が利用する場所への利用促進に関する掲示やSNS等での積極的な広報等が挙げられる。

事業名 阿蘇ふるさとづくり未来塾

[主催] 国立阿蘇青少年交流の家

[後援] 阿蘇市教育委員会

[期 日] 令和3年12月3日（金）～12月5日（日）【2泊3日】

[活動場所] 国立阿蘇青少年交流の家 阿蘇神社 阿蘇門前町商店街

[参加者] 阿蘇小学校児童4名 内牧小学校児童9名

[講師] 阿蘇インフォメーションセンターボランティアガイド3名 阿蘇門前町商店街の方々

[担当職員] 4名

[ボランティア] 3名・実習生4名

1. 趣 旨

共同宿泊体験をとおして自主性や自立心を身に付け、他者や家族への感謝の気持ち、思いやりの心を育てる。また、阿蘇地域に根差した取組や阿蘇地域を生活基盤としている人々と関わる機会を設け、「自分たちのふるさと阿蘇」の価値を再認識させることで、郷土愛を育む。

2. 目 標

- 参加者の8割が、互いに協力し合いながらの共同体験に「満足」を感じる。
- 参加者の8割が、「阿蘇のよさや魅力」について実感する。
- 参加者の8割が、自分たちの力で阿蘇をよりよくしていこうという気持ちをもつことができる。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
12月3日（金）											開会式	荷物整理	話し合い説明活動	入浴食	宿題	就寝
12月4日（土）	起床・身支度	朝食	活動準備移動	・阿蘇神社 ・阿蘇門前町商店街	活動①	屋移動	看板作製	活動②	パンフレット	入浴食	・仕上がり ・振り返り	活動③	就寝準備			就寝
12月5日（日）	起床・身支度	朝食	退所点検	広報活動	活動④	振り返り移動	ピザづくり	閉会式	解散							

(2) 活動の様子



【フィールドワークについて話し合う児童】



【ボランティアガイドの話を聴く児童】



【看板作成の様子】



【観光客へ阿蘇のアピール】

4. 成果と課題

(1) 成果

- アンケートから、「他校の人と協力しながら活動することで、仲良くなることができた」「最初は皆と活動できるか不安だったけど、とても楽しくて不安が吹き飛んだ」等の意見があり、互いに協力しながらの協働学習に8割以上の児童が「満足」を得ることができた。
- 「フィールドワークで得たことから自分たちで案を出し、パンフレットや看板を作成することで、阿蘇について今以上に詳しくなることができた」「パンフレットづくりや看板づくり、インタビュー活動をとおして、改めて阿蘇がいいところだということを実感することができた」という意見が多くあり、全員の児童が「阿蘇のよさや魅力」について再考することができた。
- 「パンフレット配布のときに観光客の質問に応えることができたとき、阿蘇をもっとよりよくしていこうという思いが湧いてきた」「観光客に阿蘇の魅力を発信することで、『教えてくれてありがとう』と声をかけてもらい、もっと阿蘇を盛り上げていきたいという気持ちになった」等の意見があり、自分たちの力で阿蘇をよりよくしていこうという気持ちをもたせることができた。

(2) 課題

- 児童が、「フィールドワークについてどのような問題意識をもって話し合うか」という時間の確保が短すぎたため、話し合いが滞る場面があった。もっと話し合う視点について意識させ、考えを引き出す手立てが必要であった。
- パンフレット作成時、フィールドワークをとおして得た情報に対して児童が情報の取捨選択に迷い、どんな情報をアピールすればよいか迷ってしまった。活動後の振り返りを全員で行い、目的について再確認させてから取り組む必要があった。

事業名 子どもゆめ基金助成金募集説明会

〔主 催〕 国立阿蘇青少年交流の家（企画・運営：熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会）

〔期 日〕 熊本会場：令和3年9月16日（木）

大分会場：令和3年9月24日（金）

〔活動場所〕 熊本会場：－（リモートによる ZOOM 開催）

大分会場：J:com ホルトホール大分

〔参 加 者〕 熊本会場：10 団体 12 名

大分会場：10 団体 13 名

〔担当職員〕 2 名

1 趣 旨

子供達に様々な体験活動を提供している民間団体等に、子どもゆめ基金についての説明会を開催することで、子どもゆめ基金を活用した体験活動の機会を増やし、より多くの子供達に体験活動を提供することに寄与する。

2 目 標

- （1）子どもゆめ基金部からの詳しい説明により、子どもゆめ基金の概要や申請書等の留意点を理解する。
- （2）質疑応答や個別相談の時間を設けることで、団体等の関係者の疑問点を解消し、今後の円滑な応募手続きを進める。
- （3）子どもゆめ基金を活用した体験活動の機会を増やし、より多くの子供達に体験活動を提供する。

3 事業展開

（1）研修プログラム

	13:00		14:00		15:00		16:00	
各回共通		受付	開 会	全 体 説 明	全 体 質 問	閉 会	個 別 質 問	

(2) 活動の様子



【大分会場：全体説明会】



【大分会場：個別質問】



【募集チラシ】

4 成果と課題

(1) 成果

- コロナウィルス感染対策を考慮し、ICT（ZOOM や GoogleMeet）を活用したことで、新たな実施形態を試行することができた。
特に、ZOOM を活用した個々をつなぐリモートは、参加者の移動による負担や感染症対策の面からも好評であった。
- これまで「子どもゆめ基金助成金」に申請したことがなく、本事業に参加することで初めて『申請したい』と回答が73%と高く、子どもゆめ基金を活用した体験活動の機会を増やすことに寄与した。
- 子どもゆめ基金助成活動の実施にあたっては、当施設を活用した活動を展開してもらえるようPRすることができ、63%の参加者が当施設の活用を希望または検討したいとの声があった。

(2) 課題

- 次年度以降も従来の対面での説明会のみならず、リモートによる参加も選択肢として盛り込むことを求めるアンケート結果があった。より多くの体験活動の機会が増えていく可能性や実現性について、子どもゆめ基金部助成課と検討を図る必要がある。
- 当施設を活用した助成活動を希望または検討している団体もあることから、当施設の活動プログラムや利用方法等を細かに説明する機会を設けたり、申請書の記載方法等への相談に応じたりするなどの支援を新たに行う必要がある。

事業名 早寝早起き朝ごはんキャラバンウィーク

[主 催] 国立阿蘇青少年交流の家

[企画・運営] 熊本「体験の風をおこそう」運動実行委員会

[後 催] 熊本県教育委員会

[期 日] 令和3年12月13日(月)～23日(木)

[活動場所] 参加希望団体の体育館等

[参 加 者] 10会場で513名

12月13日	小国町立黒川保育園(0歳～5歳)	25名
12月14日	南阿蘇村立久木野小学校(1～2年生)	51名
12月16日	阿蘇市山田保育園(1～6歳)	48名
12月17日	南阿蘇村立白水小学校(1～2年生)	62名
12月20日	阿蘇中央幼稚園(年少～年長)	114名
12月21日	南阿蘇村立南阿蘇西小学校(1年生)	23名
12月21日	西原村立河原小学校(1～3年生)	41名
12月22日	阿蘇市乙姫保育園(3歳～6歳)	48名
12月23日	内牧保育園(3歳～6歳)	73名
12月23日	高森町立高森東学園義務教育学校(1～4年生)	28名

1. 趣 旨

早寝早起き朝ごはんが健康的な生活及び教育の質を向上させるために必要不可欠であることを理解するとともに、基本的な生活習慣の確立に向けた普及啓発活動として実施する。また、本事業をと
おして、交流の家が身近な存在として誰でも利用できる施設であることを知ってもらう機会とする。

2. 目 標

- (1) 参加者の8割が活動の中で、早寝早起きが必要なことであると「とても理解できた」と感じる。
- (2) 参加者の8割が活動の中で、朝ごはんが必要なことであると「とても理解できた」と感じる。
- (3) 参加者の8割が交流の家に家族でも利用ができること、定期的にイベントを行っていることを理解する。

3. 事業展開

(1) プログラム

小学校・保育園等を対象として、着ぐるみを使ったパフォーマンスを当所職員で実施。早寝早起き朝ごはんの大切さを30分程度の演目でアピールした。

- ・早寝早起き朝ごはんの説明
- ・着ぐるみ登場
- ・○×クイズ(早寝早起き朝ごはんに関する)
- ・「生活習慣リズム感」の曲に合わせて運動
- ・交流の家の利用案内
- ・終わりの挨拶

(2) 活動の様子



【〇×クイズ】



【ダンス】



【〇×クイズ】



【ダンス】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 参加者の9割が早寝早起き朝ごはんが大切であるということを『とても理解できた』と回答。
- 引率者の9割が本事業に対して『満足』と回答。
- 交流の家を新たに知ってもらうという観点でSNS案内のチラシ作成を行い、参加者に対して配付した結果Instagramの登録者数が7名増えた。
- 熊本県において実施されている「くまもと早ね・早おきいきいきウィーク」と連携し、熊本県教育委員会や阿蘇市教育事務所と事前に情報共有を行いながら、効果的に実施することができた。

(2) 課題

- 参加希望団体が増えた場合に日程調整が難航することが考えられる。そのため、現在の2週間から、次年度は3週間に期間を延長することを検討する必要がある。
- 熊本県も「くまもと早ね・早おきいきいきウィーク」(R3年度は9月1～15日)という取り組みをおこなっているため、熊本県との連携をとる場合は早めにとる必要がある。

事業名 Seaサマーキャンプ in 芦北

- [主 催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [共 催] 熊本県立あしきた青少年の家
 [後 援] 熊本県教育委員会 球磨村教育委員会
 [期 日] 令和3年7月22日(木)～7月24日(土)(2泊3日)
 [活動場所] あしきた青少年の家
 [参加者] 球磨村の小学4～6年生 31名
 [講師] 株式会社アグリライト研究所 代表取締役 園山 芳充氏
 有限会社御立岬 直売課塩係長 枇杷木 和明氏
 [担当職員] 4名
 [ボランティア] 5名

1. 趣 旨

人吉・球磨豪雨災害で被害の大きかった地域の子供達に、海を舞台とした体験活動を提供することで、心身のリフレッシュを図り、友達との絆を深める機会とする。

2. 目 標

- (1) 海を舞台とした体験活動を提供することをとおして、参加児童が心身のリフレッシュを図る。
 (2) 体験だけではなく、山と海のつながり等、環境について学ぶ機会とする。

3. 事業展開

(1) 研修プログラム

時刻	【1日目】7月22日(木)	時刻	【2日目】7月23日(金)	時刻	【3日目】7月24日(土)
7:00		起床 6:30		起床 6:30	
		朝食		朝食	
8:00		着替え・準備		着替え・荷物の整理・清掃活動	
9:00		移動		退所点検	
10:00		活動3 海の恵みを感じよう！ 【塩づくり体験、海水浴】		移動	活動6 みんなで楽しもう！「船体験」 【海での船体験】
11:00		移動・休憩			
12:00	※あしきた青少年の家までは、保護者送迎	昼食・休憩		昼食・休憩	
13:00	入所式・アイスブレイク	活動4 学ぼう！ 海のこと 【アマモ学習の準備、移動】		ふり回り	
14:00	移動	移動・休憩		退所式	
15:00	活動1 探してみよう！「海の生き物」 【海の生き物探し、鑑賞】	活動5 海のゆりかごって何？ 【アマモ学習】		※保護者送迎により帰宅	
16:00	移動・休憩	「海」と「山」の縁結び 【おにぎりづくり体験】			
17:00	夕飯のつどい	入浴・休憩			
18:00	夕食				
19:00	入浴・休憩				
20:00	活動2 なぞを探るぞ！「光る海」 【夜の海探検】				
21:00	ふり回り				
22:00	就寝準備 就寝				

雨天時はクラフト、ニュースポーツ等で対応します。
天候やその他の事情でプログラムを変更する場合があります

(2) 活動の様子



【海の生き物を調べる】



【塩づくり体験】



【みんなで海水浴】



【観光うたせ船体験】

4. 成果と課題

(1) 成果

- 参加者全員が「楽しかった」、「まあまあ楽しかった」と答えている。参加者が心身のリフレッシュを図ることができたと思う。
- 3名のボランティアが初参加であったが、全員が協力し合いながら児童に関わる姿が数多く見られた。参加者全員が「スタッフと楽しく活動ができた」、「まあまあできた」と答えている。
- あしきた青少年の家との共催により、海の活動を行うにあたり、海の専門家としての知識等様々な助言をいただいた。そのことがより安全で充実した活動につながった。
- 山と海はつながっている。これから山を大切にしようと思う。」等の感想が寄せられた。
アマモ学習では、山からの栄養分によって生物が育つことや塩づくり・おにぎりづくりでは、海の恵みや山の恵みを学ぶことができた。山や海の豊かさを守ることについて考えたり、山と海の間をつなぐを実際に感じたりすることができた。(参加者の感想から)

(2) 課題

- プログラムを詰め込みすぎた。そのことで余裕がなくなり、活動後の振り返りや参加者が行う後片付け等、大切なことができなかった。(プログラムの流れにストーリー性をもたせるように)
- 当日の事前打ち合わせの時間が十分に取れなかった。他の施設で行う事業なので、前泊する等の方法を取り、確実に行うことが必要だと感じた。
- 活動中に水筒が空になっていたり、水分をほしがっていたりする場面があった。児童に対して、事前の対応やスポーツドリンクを飲ませる等の熱中症対策を更に強化する必要がある。

あとがき

国立青少年教育振興機構は、令和3年度に第4期中期目標期間の初年度を迎えました。

今期の教育事業等の目標のポイントは、「地域の特色を生かした、全国27施設それぞれの特色ある活動プログラムを開発するための教育事業等の展開」と、「開発したプログラムを研修支援団体に提供することによる質の高い体験の提供」にあります。

国立阿蘇青少年交流の家が立地する地域は、阿蘇ユネスコジオパークに認定されているように、世界最大級の規模を誇る阿蘇カルデラ、現在も続く中央火口丘・中岳の火山活動、日本有数の約2万2千ヘクタールもの草原など雄大な自然が広がっています。また、そこに居住されている人々の農業、畜産業などの生活の営み、熊本地震や水害などの災害からの復興、草原再生、観光等による地域活性化など、行政、企業、様々な団体が連携し、持続可能な社会の継続を目指している地域であり、特色あるプログラム展開を行うにはこれほどの地域性を持つ施設は、全国でもあまりないのではと感じています。

そのような地域の特色を生かすことに加え、今年度からは、より交流の家の取り組みを地域に知っていただくことや、教育行政との連携を深めるため、熊本県との協力体制を構築し情報共有しながら事業を展開する1年目となり、様々なチャレンジを行いました。

しかしながら、今年度も新型コロナウイルス感染症の拡大が熊本県でも広がり、教育事業等の実施に多大な影響を及ぼしたところです。結果的には5つの事業の中止となり、実施できた事業の中でも度々の日程変更などにより、ご指導・協力をいただきました皆様、参加いただいた方々にはご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

今後もコロナウィルスの影響は先が見えない状況ではありますが、私たち国立施設の職員は「体験を止めない」覚悟を持って、現在の逆境の中であっても、どうすれば青少年により良い体験を提供できるのか、持続可能な社会を支えていく人材を育成できるのかを考え、熊本県、地域の行政・民間等団体と手を携えながら、国立ならではの事業を展開していく所存であります。

どうか今後ともご指導・ご鞭撻をいただけますよう、よろしくお願いいたします。



〒869-2692

熊本県阿蘇市一の宮町宮地 6029-1

TEL : 0967-22-0834 FAX : 0967-22-0814

利用申込専用ダイヤル : 0967-22-0811

URL <https://aso.niye.go.jp>



独立行政法人 国立青少年教育振興機構

National Aso Youth Friendship Center

国立阿蘇青少年交流の家